
拳豪記

笠丸修司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

拳豪記

【Nコード】

N2997W

【作者名】

笠丸修司

【あらすじ】

時は江戸時代。徒手空拳を信条とし山籠りを続けていた桐生丈之助という男がいた。山に入り二十度目の桜が咲く頃、丈之助は修行に飽いて山を下りる。「なんとまあ、今日は朝霧の濃いことよ」深い深い霧を抜けた先は、剣やら魔法やら魔獣やらが闊歩する異世界であった。そんな現実には露知らず、夷敵・伴天連なんでもこいと乗り気の丈之助。出会う先々で剣と拳と魔法が踊るガチムチ冒険ファンタジー。

リアルな格闘小説ではありません。基本はファンタジーでござい

ます。更新速度は月一目安でござるの巻

プロローグ

丈之助の人生は不幸であった。それは農家の五男坊に生まれたことか、否、食うに困った両親に口減らしに売られたことか、否、奉公先が繁盛ならず、故郷に帰らざるを得なかったことか。そして故郷に帰ってみれば、生まれ育った村は関ヶ原の合戦の中心地となり、家や田畑が、根こそぎ無くなってしまったことか。

強者に納め、強者に売られ、強者に壊された。

強くならねば、生きられない。丈之助、十歳の決意であった。

「とまあ、なんやかんやで、俺はお師様と逢ったんだっけかなあ」

瓢箪を傾け、積み石に酒をかけながら男は呟いた。

佇む男はこの時代には珍しき、6尺ほどの大男。十の少年は山中で逞しく成長し、丈之助は三十路を迎えていた。

「山に入つて、お師様と逢つて、鍛とつてもろつて……」
「……いや正直、最初は殺されると思つとりましたわ」

ははは、と感慨深げに丈之助は呟いた。丈之助が持っている瓢箪が完全に逆さまになり、ぴちゅん、と瓢箪から水滴が落ちた。上下にさつさと振るも、酒はもう出てこない。

「……お師様がお亡くなりになつて、十年経ちました」

そう言つて丈之助は視線を横に移した。そこには人の背丈ほどの丸太があり、ゴツゴツとした無骨な表面に幾つかの拳打の後が伺える。その丸太には奇妙な点があつた。それは拳打で打ち付けたとは到底思えないような傷跡の存在である。拳大に陥没した穴。その穴は、何か重量物をぶつけて碎けた跡では決してなく、ヤスリを掛けたように滑らかにへこんだ跡であつた。

「……最後に伝えてもろつた技もこの通りですわ」

そして丈之助は座を正し、積み石に向かい頭を下げる。十歳で山に入った時、おそらく丈之助一人ではそう長くは生きれなかつた。師と出会えたから今の自分が此処にある、その感謝の礼である。

「お師様。今まで、大変お世話になりました」

長く、深々した座礼の後、丈之助は別れの言葉を吐き出した。そして立ち上がり、振り返る。

「……本日この場から、お師様の、桐生の名を継がせて頂きます」

関ヶ原の合戦から二十年後。 齡三十となつた桐生丈之助は、己の

強さを示すために山を下りることを決意するのであった。荷をまとめ、立ち去る桐生丈之助。ざ、ざ、と進みゆく彼の姿を濃い朝霧が包み込んでいった。

プロローグ（後書き）

そんなこんなで三十路のおっさんが、素手でどんどこやっていく物語。異世界モノにする必要があるかも考えましたが、魔法対拳とか、ムラムラする性質なのでそんな進行で進みます。

第一話：下山

山を下りる。

桐生丈之助は朝方にそう決めて歩き出したはずであった。しかし、丈之助は未だ山の中にいた。下れども下れども、麓には着かず、引き返せども山頂へも辿り着かないのだ。

「……これはどうしたことかな」

丈之助はガジガジと頭を掻きながら呟いた。いくら霧が濃いとは言えど、丈之助はこの山に住んで二十年になるのだ。生活を始めた頃の子供の頃は露知らず、今となっては庭のようなものになっていた。

「いやはや、狸にでも化かされたか」

捕まえてたぬき汁にしてやろうかとひとりごち、丈之助は更に山を下ることにした。とにかく麓か川に当たれば無事に下山できるであろうという考えである。霧は、未だ薄まりそうも無かった。事実、この時丈之助は日の本の国ならぬ、異世界へと足を踏み入れていたのだが、当の本人は知る由もなかった。

いかほど経ったであろうか。

相も変わらず山を降り続ける桐生丈之助であったが、ふとその足を止めた。

ガサリ、ガサリと遠巻きにざわめく草切り音。付かず離れず距離を保ち、息を潜める獣の息。

獣臭。

丈之助が足を止めた理由は、それであった。

時に、使うものはその身一つと前置いた上で、闇に潜み獲物を狩るといふ行為において比較した時、果たして優れているのは人と獣。単純にどちらであろうか。それはもちろん獣である。人と獣は体の作りがまるで異なる。人は木々の間を素早く駆け抜ける四肢を持たないし、数十メートル先にいる存在を臭いで判別などできない。もちろん、低姿勢のまま音もなく歩くための体構造を持たないし、狩りの武器となる爪や牙を人は持たない。山の中にたかが二十年住んだとはいえ、人が獣に狩りで勝てる道理はないのだ。

獲物に足音が聞こえ、

獲物に息遣いが聞こえ、

獲物に獣の臭いが悟られる距離。

それは、狩る側が獲物に対して自分の気配を気取られることを許容した瞬間であり、

狩る側は獲物に対して自らが勝てると踏んだ瞬間であり、

丈之助が、獲物闇に潜む獣に対して、エサと認識された瞬間であった。

ぼたり。

まず丈之助に聞こえてきた音は水滴の音であった。続いて腹に響くような唸り声が耳に届く。巨木の影から覗いた口元。牙と牙の間から伸びた舌より、抑え切れない涎がぼたぼたと滴っていた。ずりりと森の闇から獣の全容がまるびでる。丈之助の進路を遮るように現れたそれは、毛皮に覆われた体躯を持ち、太い四肢には鋭い爪、そして餓えた意を顔面に惜しみなく貼りつけた大きな熊であった。

「…………熊公かい」

そう呟く丈之助に、熊はそのそり、のそりと周囲を徘徊する。熊が丈之助の風上に回るたびに獣臭が丈之助の鼻を突いた。そして、その円を狭めようと熊が一步その歩を進めた時、丈之助が口を開いた。

「…………主あ、わしを食つかよ」

熊と、丈之助の視線が合う。この時、熊が丈之助をどう見ていたかは定かではない。丈之助は熊に取ってエサであった。现阶段では決してそれが変わることは無い。しかし、丈之助と視線が会うや否や熊は立ち上がり、諸手を掲げ、丈之助を威嚇した。

丈之助は荷を降ろす。

熊に向かい、腰を落とし、右半身に構える丈之助の表情に恐れは無く。

ただ、ただ、無邪気に。

口元を釣り上げ、嗤っていた。

みしり、と丈之助の体が軋みを上げる。それは、歓喜の震えであり、力みの証であった。

前に出した右足の指ががっしと大地を掴み、風を切り裂き丈之助の体を前方へと運ぶ。一息で数メートルもの間合いがゼロになり、同様の速度で丈之助の左足がずんと羆ひくまの腹へと突き刺さった。そして丈之助は深く突き刺さる左足の感触を味わいつつも、直ぐ様その場で横へと転げた。

人を打った時よりも何倍もの強固な肉の壁に跳ね返された感触。それが丈之助が左足から感じた感覚だった。

羆ひくまの爪が、空を裂く。丈之助の蹴りが埋まった直ぐ後に、羆ひくまの右手が横に薙ぎ払われていた。

「はは、やはり熊公に当身は薄いかよ！」

丈之助はそう叫びながら直ぐに次の行動を始めていた。野生の獣、特に熊に対して同じ攻撃はできない。彼らの本能と運動能力、そして知能を甘く見てはいけない。同じ踏み込みから再び蹴りを打つやいなや、今度は羆ひくまの爪が丈之助の体を引き裂いているだろう。

丈之助が移動したのは羆ひくまの右後方。そして右手を振り回した勢いで羆ひくまが右回りで振り返った。それと同時に丈之助の右足が地を蹴たぐる。羆ひくまの視界を瞬時に横切り、左回りにて羆ひくまの真後ろに回りこみ

左手で熊の背な毛を掴み、飛び上がった。
振り上げた右拳の型は人差し指を突出させた一本拳。
自らの肩口から突如現れた丈之助に熊の心境は如何ばかりか。

振り出された拳がズブリと突き刺さる。同時に熊の視界半分が赤く塗りつぶされた。

ぎゃん、と嘶き丈之助を振り落とそうと暴れる熊。しかし、そうは行かぬと丈之助は刺した拳をさらに押し込んだ。

「！！！」

その瞬間、声にならない叫び声を上げて熊が転げ回った。さすがに丈之助もその膂力に耐え切れず、振り落とされ周囲の木々に叩きつけられた。

再び同じ距離で対峙する丈之助と熊。

しかし状況は一変していた。

エサに思わず手痛い反撃をくらい、片目を失った熊に対して、乾坤一擲の一撃をみまっした丈之助。熊は片目から流れ出る血をそのままに、ぐるると低く唸り声を上げていた。

「どうした、其れしきの傷で怖気付いたか！！！」

その丈之助の声色に、熊は激昂した。言葉は通じずとも、もはや命のやり取りをしている関係である。丈之助の嘲りは、言語の壁を超えて熊の神経を逆なでした。折れかけた精神を奮い立たせ、ここぞとばかりに熊が吠える。そして体を撓め、その強靱なる四肢を持

つて一直線に丈之助に向かい飛びかかってきたのだ。

振り上げられる爪、そして牙、さらに丈之助に被さるうとする大きな体躯。

爪に囚われれば、牙が刺さり、

爪を受けても牙が刺さる、

爪を躲せどその体躯に押しつぶされ、

体躯を跳ね返す力には無し。

「されど此処で後ろに引くは、武人の恥よ！！」

そう言つて丈之助はわずかに体をずらす。

爪は躲さない、前に踏み込み根元で腕を受けるのだから。

体躯は受け止めない、左にずれることで中心を外れるのだから。

牙は受けない、丈之助の目的は、その牙の奥にこそ在るのだから。

「応！！」

丈之助は大きく右足を踏み込む、鬮ひくまの腕がラリアットの如く丈之助の体に当たるがお構いなしだ。衝撃でぶれる視界の中、全力で伸ばした丈之助の拳が鬮ひくまの牙を通り越し、その口腔の奥まで突き刺さる。そしてそれと同時に、丈之助は体を捻ひくまった。鬮ひくまの突進力を回転力に変えて、自らの身体を基点に突き刺した拳と左手で鬮ひくまを自分の左後方へ引きずり倒したのだ。

そして、丈之助はさらに垂直に拳を突き込んだ。ずつと粘膜がこすれる音が聞こえる。拳は鬮ひくまの気道を塞ぐ形で深く嵌り込む形になった。牙は刺さらない。丈之助の拳と腕が口腔内を占領しているのだ。この状態では多くの生き物は構造的に顎を閉じることが出来ないのだ。鬮ひくまが暴れる。しかし、喉の奥まで腕ひくまごと差し込んだ拳は

そうそう抜けるものではない。されどくまの意識は未だ途切れず、まさに死に物狂いで丈之助の体を削っていった。おまけに、顎が閉じられないといっても完全に閉じれないと言っわけではなく、多少の噛み付きは可能なのだ。

「はっはっは、こうなりや根比べよ……」

そう言って、まるでじゃれ合うよう子供のような笑みを浮かべた後、右腕に伝わる牙の痛みを感じながら、お返しとばかりに丈之助は残ったくまの片目にぎっくりと指を突き入れるのであった。

いかほど経ったであろうか。くまがピタリと、動かなくなる。

そして、丈之助は拳を突き刺したまま、くまの頭を抱え上げ、体ごとそれを捻った。ゴキリと鈍い音がこの闘いの決着を告げていた。あたりの霧は晴れていて、ふと見れば視線の先には木々が途切れており、流れる川と整備されているらしき道が見える。全身血だらけの身なりとくまの死体。風呂と食事をいっぺんに解決しようかと、丈之助は歩を進めるのであった。

さて、丈之助が仕留めたこのくま。この世界では、人食い熊として度々街道の旅人を襲う事で有名な賞金首（識別名：リガルド）とし

て手配されていた凶悪な魔獣であり、冒険者ギルドの手には負えず、特例としてイプストリア王国騎士団が出兵する手筈が整えられ、今まさにこの場へ向かっている最中であつたりするのだが、この場が未だ日の本の国だと思つている桐生丈之助にとつて、その事實はなんら関係の無いことであつた。

第一話・下山（後書き）

次回は所謂第3種接近遭遇。金髪のねーちゃんやら金髪の兄貴やら。

第二話：出会い

ここ、エラルド街道の川のほとりで、2メートルを超える背を屈めながらイプストリア王国騎士団遊撃分隊長エルヴィン・アーネストは、目の前の光景にどうしたものかと首を捻っていた。たった今、彼を含む分隊以下5名は凶悪な賞金モンスターであるリガルド討伐の勅命を騎士団より受け、討伐に馳せ参じたわけである。そして、過去リガルドが出没したという地域を調べ、街道にそって警備をしている最中であつた。

目の前に見えるのはリガルドの死体と、血に塗れた人の衣服、そして焚き火にくべられた大きな鍋である。おまけにその鍋の中にはグツグツと肉が煮込まれているのだ。その肉が何の肉かは言わずもがなである。

「……兄さ、隊長、これ、たぶんリガルドですよね？ ……信じられませんか？」

分隊副隊長のクレア・アーネストは、屈み込む隊長の横から手配書を片手に覗き込んだ。ちなみに隊長と呼び変えたのは途中でエルヴィンがギロリと振り返り、クレアを睨んだからである。

「大きさも合っていますし、毛皮の色、それに左手小指の真つ赤な爪。全部一致してますね」

確かに手配書通りのリガルドの姿である。討伐完了。事件解決。めでたしめでたしといきたいところであつたが、当然そのような事がある訳がなかった。

それで落着していたら騎士団やギルドは要らないのである。

「……やれやれ、数ヶ月滞留していたギルド案件だぞ。いきなり凄腕の冒険者が現れてはい片付けましたってのも都合が良すぎるだろ」

そう呟いて、エルヴィンは改めてリガルドの死体をゆっくりと見回した。やっかいなことになったと、小さく口に出す。

リガルドの不自然な死体。

そう、この死体の不自然さについて気づいているのはエルヴィンだけであった。

不自然なほど、綺麗な死体。

リガルドの死体には、食するために内臓の除去や血抜きのための刃傷が伺える。しかし、よく見てみるとそれ以外の傷が全く無いのである。槍で突いた傷、剣で斬りつけた傷、矢が突き刺さった傷、それらの存在が皆無であった。そして、リガルドの潰された両の目。武器を使わず、この何者かは如何にしてリガルドの眼を潰したのか。

「……魔法士、それならば」

そう、それは想像の範囲内である。

今回、リガルド討伐において最も大きな難関はリガルドの知能であった。大人数の前には決して現れず、畏にはかからず。かの熊はこの半年間討伐隊をあざ笑うかのように人を襲ってきたのだ。それを受けて、今回の少人数の編成も討伐可能なギリギリの人数で組まれている。しかし、少人数でもエルヴィンたちは討伐失敗の可能性は皆無と考えていた。それは魔法士の存在である。個にして圧倒的

な殺傷能力を持つ魔法士、それが今回の討伐隊の主役であった。しかし、エルヴィンは疑念を捨て切れない。リガルドの死体の横に脱ぎ捨てられていた血濡れの衣服を拾い上げる。鋭い爪の様なもので引き裂かれたと思われる切っ先傷。これも不自然である。

いったい詠唱が必要な魔法士が、リガルドの爪が届く間合いで何をやっていたのなのだ。

(もし、魔法士で無いとしたら)

そう考えた時、エルヴィンの背筋になんとも言えない感情が走るのであった。

「しっかし、美味そうな匂いッスね」

「腹も減ったし、頂いちまおうか」

そんなエルヴィンの意識を現実に戻したのは、鍋を覗き込むのは同分隊の騎士たちであった。

彼らは振り返ったエルヴィンの形相を見るなり、直立する。

「お前らは街道を探せ、食事の支度をしてるぐらいだから、瀕死でことも無いだろうがこの出血だ。どこかで倒れてるかもしれない」

「「「はっ」「」」

分隊の3人は威勢よく敬礼し、そそくさと騎乗しそれぞれの方向へと散るのであった。そしてエルヴィンはクレアに振り返る。自分が森の中に入るので、クレアにこの場で待機を命じようと口を開こうとしたところである、

「私は兄様と一緒にいいです、んふ」

と、クレアがエルヴィンの発言を遮った。せつかく二人きりになったのですから、と付け加えて人差し指をコネコネしながら自分を見上げる妹に、エルヴィンは大きなため息をつくのであった。

幼い頃から兄であるエルヴィンにべったりであったクレアだが、思春期を境に兄離れををすると思いきや拍車がかかってしまっていた。早くに父親を亡くしたためか、年の離れた兄妹ということが影響してか、クレアは異常にエルヴィンに懐いてしまっていた。騎士団に入れば流石に追ってはこれまいと思っていたのが運の尽き、この一途な妹は魔法という才能を開花させ、今年始めに恋する乙女十八歳として目出度く再びエルヴィンの前に現れたのだ。

「……クレア」

そう言ってエルヴィンはクレアの金色の髪をかきあげ、頭にぼんと手を載せた。

じつと見つめる妹のまなざしに多少照れながらエルヴィンはまじまじと話しかける。

「森の中は視界が狭い、詠唱が必要なお前は危険だ。わかるだろ？」

お前が大事だから残すんだと、エルヴィンはクレアの目を見て説得を続けた。クレアの説得にかけること10数分。エルヴィン「アーネストもそこそこの妹バカであった。

さて、そのような理由で騎士団員が街道へ探索へ出かけ、エルヴインが森へ入り、リガルドの死体とぐつぐつと煮える鍋の傍らでクレアは一人待機することになったのである。森とは街道を挟んでいるので距離はあり、街道自体はまっすぐ視界が開けている。後方は緩やかに流れる川があり、悠々と流れる水流が、周囲の穏やかさを物語っていた。

「それにしてもいい匂い……」

赤茶色のスープがぐつぐつと煮立つ鍋を見て、クレアはしゃがみ込こむ。きよろきよろと周囲を改めて確認。誰もいないことだし、ちよつとぐらいいいかしら、と沸き立つ香りに向かって手を伸ばした時だ。

川の水面がずっと盛り上がる。思わず息を飲むクレア。そして、平和な水面に突如ざばんと湧き出た黒い塊はクレアにどう映ったか。黒い塊の正体は、普段縛っていた髪の毛を解いた状態の丈之助である。奇しくも丈之助の肩ほどまである黒髪は、水をたっぷりと纏って面妖な雰囲気を出していた。そして丈之助はクレアの存在を差して気にするまでもなく、両の手に捕まえた魚をぼいぼいと放り投げ、よつこらしよと岸へと上がるのであった。禪を片手にパンパンと体の水を切る丈之助の姿は、もちろん全裸である。

「あ……、え……ちよつ」

そんな丈之助がしゃがんだクレアに気づいたのは、髪を後ろにまとめ直し、搾り出すような彼女の声ができる方向を向いた時である。しかし、丈之助が声の方向を見ても誰もおらず、ふと彼が下をみやると、そこには丈之助の股間と世紀の対面を果たした金髪の少女が

存在した。世界を超えた最初の出会いはこうして果たされたのであった。

「なんじゃ、見慣れぬ土地だと思うたが、伴天連の国まで歩いてきてしもうたか」

正確には全く異なる世界ではあるのだが、そんなことは露知らず、はっはっは、と豪快に笑い出し、クレアを横目に禪を体にパン、と叩きつけ、体の水気を切り続ける丈之助であった。

「……い、いや」

幸か不幸か、細く搾り出されるクレアの声は丈之助には届かない。

「しかし、お前さんの様な娘子がこころで一人とは危険よの、見ての通り熊公がでる」

と、再び丈之助がクレアへ振り返った時だ、

「いやああああああああああああああああ！！」

そこには、悲鳴を上げながら上段から剣を振り上げ丈之助に斬りかかるクレアがいた。クレアは若干18歳とはいえ、イプストリア騎士団の一員である。魔法士として入団を許されたものの、彼女は剣を使えないわけではない。騎士団標準のバスタードソードは振り回せないものの、ショートソードの扱いはそれなりの腕前なのである。

ショートソードの軌道は右上段から左中段へ、頸動脈から脇腹の内臓を狙ったえげつない一撃である。斜めの無でるような一撃の後、

切り返しの踏み込み突きで腹を狙うのがクリア得意の型であった。リーチが短いゆえに、ショートソードの素早い横方向の斬撃に、後ろへ距離を取るうとする相手に対して、予測を超える速度での刺突は効果的であった。騎士団での模擬時合でもなんども彼女はこの型を決めてみせている。だがしかし、それはあくまでも対長剣、盾鎧装備の騎士団内の話である。

ぱんっ

不意に破裂音が周囲に響く。クリアが切り下げるその腕は突如上から荷重が加えられ、切り返すはずの剣はそのまま地に刺さる。次いでぎり、と手首に締まるような痛みを感じ、クリアは思わず剣を取り落とした。

彼女が自らの腕を叩いた物が、丈之助の手に握られた布と気づけたのは、剣をその手から取り落とした後であった。そして我に返ったクリアが丈之助を見れば、そこには手にした布を下半身に巻きつけ、ぱんと己の尻を叩き

「ふむ、娘子にしては良い太刀筋、異国まで来てはしもうたが、これからが中々楽しそうじゃ」

と、にんまりと丈之助が笑っている姿であった。

その光景がクリアに残った最後の理性を破壊する。いくら驚いたといえど、旅の冒険者に突然斬りかかった無礼などなんのその、

「兄様、私は汚されてしまいました……」

とり落とされた剣を拾い。クレアは呟く。さあ立ち上がれ、我が敵は乙女の敵。穢を知らぬこの眼を辱めた挙句、不浄の布にて手までも犯されたこの怒りの捌け口は目前の敵を屠ってこそ癒される。いや、それだけでは生ぬるい。完膚なきまでに目の前の男を叩きのめし、川へと流し、

「そう、いつそ全てを無かったことに!!」

とても理不尽にクレアは叫んだ。同時にクレアを中心に展開する魔方陣。ショートソードを片手に詠唱開始。

「水よ」

詠唱が進むほど集積する魔法力。

「大いなるイプスよ」

クレアを中心に風が逆巻く。

「その力、流れる刃よ」

丈之助は動かない、彼は魔法というものを未だ知らないのだから。

「クレア!!アーネストの名のもとに」

詠唱が完了する。

「ウオルタ・ブレイズ力・在れ!!」

それは実に美しい光景であった。空間から流れ出る幾つもの水流がクレアの周囲に収束。それらは水の刃となり彼女の周囲に浮遊する。日差しに反射し煌く姿が、頭髮の色も相まって神々しさを増していた。その神聖さに魔法を知らない丈之助が戦闘態勢を取らず見とれていたのは、無理も無い事かもしれない。更に、彼女が手にしたショートソードにも変化が起こる。刃の周囲にも水流が展開固定化。見ればもはや手にしているのはショートソードではなく、刃渡り数メートルの長剣である。

「うふふ、ふふふふふ」

そしてクレアは丈之助に見せつけるように、その剣をまるで重さを感じさせずに一振りする。川の周囲の雑草が、揺らめくでもなくバツサリと切断されたのである。その事実を目の当たりにして丈之助はようやく自分が後手に回ってしまったことを悟ったのである。

自分は、相手の殺傷範囲の真っ只中にいる。そう判断した丈之助の判断は素早かった。その場を飛び退き、弾かれたように後退、そして息つく間もなく十数本の水の刃が丈之助がいた場所へと突き刺さる。離れた間合いで地面に突き刺さった水の刃越しに、丈之助は苦々しく彼女の姿を見るのであった。

「逃がさないですよ？」

その言葉と共に、クレアの周囲に展開していた水の刃が丈之助を取り囲む。丈之助の逃げ場を奪ったことを確認してクレアは構えた先にいなされた上段の構えである。それはクレアが丈之助に宛てた無言のメッセージであった。今度こそ、躲せるものなら躲してみろ、と。ショートソードと変わらぬ速さで振り下ろされる数メートルの水の剣に、それを躲した後に来るのは突きではなく、中空に漂う無

数の刃だ。

そして、それを理解した丈之助は笑う。か弱い娘と思うたが中々どうして武士もののぶよと。世の中は広い。こうして通じ合える武人との出会いは、丈之助にとってまさに僥倖である。山を降りてよかった。命が尽きるかもしれないこの瞬間。丈之助は改めてそう思えたのであった。

しかし、丈之助にとって此度の出会いは素晴らしいものであったのだが、勝ち負けは別問題である。若き異人の娘、荒削りながらも今丈之助を追い込んでいる強大な技量、様々な思いが丈之助の胸の内に反芻する。そして丈之助が最後に出した結論は、やはり己の命であった。この娘には才能があり、未来もある。理解出来ない面妖な術などもあり、年を重ねれば自分など足元にも及ばない力を身につけるかもしれない。しかし、この場で自分にその刃を向けるのであれば。

「仕様が無いのだ、俺はそついう者じゃからのう」

そつ呟いた丈之助が纏う空気が変わる。クレアの様に丈之助に魔法のような奥の手は無い。ただ、気の持ちようを切り替えただけである。数メートルに及ぶ水の剣も、丈之助の周りに浮かぶ無数の水の刃も、全て自らに仇なす脅威と受け入れた上で、丈之助は言った。

「さて、殺したくは無いが……」

その言葉を聞いたクレアの心境は如何ばかりか。丈之助の周囲は未だ水の剣刃で囲ウォルター・ブレイクスまれている。しかし、当の丈之助の落ち着きようを見ると、単なる強がりとも思えない。

「あなた、何を言って」

その疑念を口にしたタイミングがクレアと丈之助の主導権が入れ替わった瞬間であった。

それは長く体術を治めたものだけができる動き、予備動作なしの動作移行。丈之助の発言に気を取られ、クレアが疑念の言葉を口にした瞬間。丈之助はクレアの視界から一気に消えた。次にクレアが捉えた光景は、一直線に森へと駆け込もうとする丈之助の姿であった。

圧倒的優位に立っていたクレア唯一の失念は、クレアの魔法水の剣刃がクレアの意思に対して反応する操作系魔法であったことである。いくら無数の刃があろうとも、クレアが反応できない動きには対応できないのである。つまりはその多重攻撃性による攻めは強力であるが、受けや対応に回るとめっば弱いのだ。それは、これからクレアが長い年月と経験を経て補われるであろう水の剣刃の弱点。丈之助は知ってか知らずか、そこを的確に突いたのである。

「させません！」

中に浮かぶ水の剣刃の無数の刃が丈之助を背後から串刺しにすべく襲いかかる。丈之助が森の中へ飛び込むのと、クレアの水の剣刃が森の中へと突き刺さるのは同時であった。

ざん、ざん、ざんと木々を貫き、地へと突き刺さる水の剣刃。その衝撃で木々がゆさゆさと大きく揺れた。

失敗した、そうクレアは心の中で舌打ちをした。こうなっはクレアには丈之助を仕留めたかどうかを判断する材料は無い。し

かし、自ら視界の悪い森の中へ入る愚は犯せない。ここに来てクレアは主体的に動ける選択肢を無くしてしまった。

そして、目の前から消えてしまったターゲットに、クレアは水の剣刃ウォルタ・ブレイズを解除しないものの、相手は逃げだしたという僅かばかりの疑念が浮かび上がった。

それが命取りである。

クレアの上空。

ウォルタ・ブレイズ水の剣刃を避けきれずも、生きながらえた丈之助。

ウォルタ・ブレイズ水の剣刃の刃による攻撃は、中空に浮くという性質から、迫り来る斬撃は当然上から下方である。その性質を本能的に理解した丈之助は森へ飛び込むやいなや木々を伝ってクレアの上空へと躍り出た。そして、その手の中には拳よりも二回り小さな石がある。

みりり、と丈之助の広背筋が盛り上がり、下方のクレアを見やる。それと同時に地に映った影に気づき、中空の丈之助をクレアが視認した。

ウォルタ・ブレイズクレアの水の剣刃が展開する。

その切っ先は全て上空の丈之助だ。しかし、

「おそいがの!！」

と、丈之助がその右手を振り抜こうとしたその時である。

「やめんか馬鹿妹^{クレア}」

エルヴィンの槍の長柄がごん、とクレアの後頭部に振り下ろされたのである

第二話・出会い（後書き）

異世界人とのファーストコンタクトは股間でした。ごさるの巻。
2011/09/11 ちょっと改稿

第三話：宴席

「やめんか馬鹿妹^{クレア}」

エルヴィンは槍の長柄にて、眼前で惜しげもなく魔法展開をさせている妹の頭を呆れ顔でど突くのであった。

「お兄様!!」

と反射的に後ろを振り向くクレア。そしてその瞬間、丈之助が投擲した石がビュンと今までクレアの頭があった場所を通り過ぎ、往來に踏み固められてそれなりに硬いであろう街道の土に、どずんと深くめり込むのであった。その結果にクレアは思わず後ずさる。

「クレア、魔法を解除しろ」

数瞬遅れて丈之助が着地する。しかし、既に丈之助はエルヴィン達を警戒しつつも戦闘態勢を解いていた。

「でも兄様!!」

「いいから、怒るぞ?」

未だ納得がいかないクレアに、エルヴィンは彼女を諷めた。しぶしぶクレアは水の剣刃^{ウォルタ・ブレイズ}を解除する。そして、エルヴィンは丈之助に向き直り、深く礼を取った。

「自分はイプストリア王国騎士団、第15分隊長エルヴィンニア・ネスト。冒険者殿、隊員の無礼をお詫びする」

エルヴィンの一礼にふむ、と頷く丈之助。突然の闖入者にどうしたものかと一時考えこむが直ぐに警戒を解いた。

「よいよい、中々に楽しい立会いじゃったわ」

その言葉にエルヴィンは一息つき、顔を上げ丈之助を見やり、観察した。丈之助に体には比較的新しい傷痕が幾つも伺えた。その鍛え抜かれた体躯にはリガルドのものと思われる爪痕と、クレアの水ウツの剣刃による切り傷がある。しかし何よりエルヴィンの気を引いたのは、その体の至る所にある古傷の数であった。無数とは行かないまでも体中に付けられた戦傷いくやけは、まさに異様な雰囲気醸し出していた。そしてエルヴィンは嫌でも心の内にある疑念に対する確証を得たのである。

「リガルドを倒したのは、貴方が」

エルヴィンの言葉に丈之助は、はて、と首をかしげた。

「リガルトとは、アレだ」

理解が追いつかない丈之助に対し、エルヴィンは川沿いの死体を指さした。

「ん？ おーおー、あの熊公の事か。然り然り、確かにアレをのしたのは俺じゃ」

やはり、とエルヴィンは心の中で思い至る。その後ろでクレアが「嘘……」と絶句していた。

「いや、それは凄い、奴には迷惑しててな、実は我々の目的も彼の

熊の征伐であったのだ」

「なんと、獲物を横取りしてしもうたか、此れも時の運よ、悪く思うな、わはは」

と、丈之助が笑いながら返す。エルヴィンはその様みてかえって手間が省けたと笑い返す。そんなやり取りをしながら、エルヴィンは目の前にいるこの男は悪い男では無いなと心中で思うのであった。そしてたわいもない会話を幾度かした所で、ぐー、と丈之助の腹の虫が周囲に響く。丈之助は鍋の方向を指さしながらエルヴィンに話しかけた。

「どうじゃ、これも何かの縁、幸いにして肉は腐るほどあるからの食ってくか？」

「それは有難い、実はさつきから気になっていてな」

「その娘っ子も気にすることは無い、命のやり取りまで行かなくてよかったの、勝負は俺の勝ちじゃがな。はっはっはっ」

そう笑い飛ばすと、丈之助は鍋の方へと歩き出した。
クレアとエルヴィンも丈之助に追従する。

「……で、あいつはどんな魔法を使ったんだ？」

歩き出す丈之助の様子を伺いながら、小声でエルヴィンは未だ絶句しているクレアに問いかけた。

「……ないです」

「何？」

「兄様、あの人は魔法士では無いです」

エルヴィンの足が、はたと止まる。

「あの人、私との戦いでも全く魔法は使いませんでした。私が詠唱してる時もぼーっとしていましたし、まるで魔法自体を知らないような動きでした、おそらく、おそらくですけど、リガルドも、たぶん、いえ、想像したくないですけど、……きつと、きつと素手で」

川沿いに脱ぎ捨てられていた爪に引き裂かれたような痕跡。至近距離でしか付かない筈の傷跡。エルヴィンの予測では、身体強化の類の魔法かと当たりを付けていた。しかし、クレアの話では、クレアが彼に対して魔法で戦っていたにも関わらず、彼の男は魔法を使わなかったということであった。

「あのリガルドを……、魔法なしで単独でだと？」

ぶるりと、エルヴィンの背筋に冷たいものが走る。

「あ、でも兄様。現場を見たわけでは無いですし、もしかしたら強い武器でも持っていたかもしれないですし、そんな真面目に考えなくてもいいかも……」

先の自分と同じく絶句するエルヴィンに対してクレアはわたわたと焦り、言葉をつないだ。

「そうそう、あのお鍋楽しみですね、実は私も気になってたんです、ふふ」

と、クレアが口に出した時だ。

「ん、とするとなんだ、……お前は魔法が使えない相手になんて魔

法を使つてたんだ？」

「えう！？」

エルヴィンの言葉にクレアがビシリと固まる。

「……そもそもだ、なんで彼とお前が戦つてたんだ？ クレア、念の為に聞いておくが、お前何かやらかして無いよな？」

「あう！？ えーと、兄様？、その…… ないです！！、な、何にもないです！！」

まさか自分が勝手にぶち切れてとは言えず、クレアはそれ以上何も言えず口ごもる。「いつそ全てを無かったことに！！」等叫んだ拳句、奥の手である魔法を振り回しましたなんて言えるわけがないそんな様子を見てエルヴィンは先に歩いて行る丈之助を見やり、大きな声で問いかけた。

「あー、冒険者殿？、ちなみにうちの隊員と戦つた理由を聞いてもいいか？」

「うむ、俺が行水してたら、その娘っ子が斬りかかってきたんじやが、まあ、気にしとらんかの？」

「あー……その、本当にすまん……」

力の抜けた声で、エルヴィンは丈之助に改めて詫びると、クレアの方にぽんと手を起き

「仕置だ」

と、一言。

槍をずんと地面に突き刺し、クレアをその長柄の先に引っ掛けた。

「兄様！、ひどいつ、これには、これには深いわけがあるのです！！」

そんなクレアの悲痛な弁解を

「ないな、お前はちょっと反省してろ」

と、捨ておくエルヴィンであった。

ミド大陸に東部に位置するイプストリア王国。大陸の四分の一を支配域に収める大国である。ミド大陸は大きな円状の大陸である。さらに、大陸の中央に大きな山脈がそびえ立ち、東西を分断していた。そして、ミド大陸には幾つか大小の国があるが、代表的な国は4大精霊の加護を受ける4つの大国である。

水の精霊イプスの加護を受けるイプストリア、

火の精霊フューリーの加護を受けるグランセル、

風の精霊ウィルドの加護を受けるローラン、

土の精霊ゴルガンの加護を受けるゼルシュタッド、

大陸東側にイプストリアとローランがあり、山脈を挟んで西側にグランセルとゼルシュタッドという形だ。そして東側には南北を分割して流れるイクス大河と呼ばれる大河川が存在し、北側にローランがありイプストリアは南側となる。

「で、まあイプストリアの周りも大小の国はあるがな、その殆どが公国扱いだ」

そうエルヴィンは言う。鍋から肉を取り、口に持っていく。鍋の周りには丈之助とエルヴィン、そして分隊の騎士3人が車座になって座っていた。

「……しかし、美味いっすねこれ、ミソって言っていましたっけ」

分隊の騎士の一人が更に鍋から肉を取り、呟いた。

「ふーむ、主らの国、あー、いぶすとりあ、だったか。味噌が無いとは珍しい国よの」

日本では一般的な食事である味噌に対する高評価に、丈之助は頭をボリボリと掻くだけであった。

「しかし、このぺっぱーとやらも中々にそそるものよな」

そう言って焚き火に熱せられた盾の上で焼かれた肉を摘み、丈之助はパクリと口の中に放り込んだ。

「うむうむ、なんとも刺激的よ」

旨そうに肉を嚙下する丈之助の様子を見て、再びエルヴィンは口

を開いた。

「しかし、丈之助殿がイプストリアを知らないってのは信じられんな、この国、いやこの大陸なら子供でも知っている常識なんだが……いや、誤解がないように言っておくが、自分は丈之助殿が嘘を付いているとは疑ってはいない、ただ丈之助殿の様な黒髪・黒目の人間は、自分は今まで見たことがないんだ」

「今は四大国の影響域付近は平和だが、中央山脈近くの少国群では少なからず、争いも存在している。その地域では国自体が無くなってしまうことも無いわけではない……」

そのエルヴィンの言葉に丈之助以外の食事の手が止まる。実際、丈之助はこの世界とは異なる世界から来たわけだが、その事実はエルヴィン達は知る由もないし、丈之助自身の自覚もあるわけが無かった。

「ふむ、俺が国は、無くなってもうたということかの」

エルヴィンの言葉を受けて、そう、丈之助は呟いた。その間も、彼は黙々と口に肉を運び続ける。

「あー……、丈之助殿？」

その様子を見て、エルヴィンが間の抜けたような声を上げた。

「まあ、俺の人生はお国に全部奪われた様なもんじゃからの、親兄弟ももはや何処に居るのかもわからん。帰る家も無いし、故郷にも愛着は無い、つまるところ、どこであろうと、……生きていければ問題ないのよ……っつと」

と、悪戯つ子の様な笑みを浮かべ、丈之助はエルヴィンの前にある肉を取ろうと手を伸ばした。その表情を見て、エルヴィンはようやく丈之助の狙いに気づく。

焼肉場、そう、此の場は場面は違えど漢の戦場であつた。肉を焼き肉を喰らう、自らの領土を確保し、肉という生産物を奪い合う。これはある意味戦争の縮図である。そしてあるうことが、今まで丈之助は己の身の上をも武器として、戦果を着々と獲得していたのである。全てを瞬時に理解したエルヴィンの右手がガシリと丈之助の腕を掴んだ。

「……丈之助殿、それは自分が丹精込めて焼いた肉故、情を武器に掠め取るうとはいささか卑怯では？」

「わはは、……いやあ、エルヴィン殿は出来る人じゃ、もうちと行けると思うたんがのう？」

「丈之助殿、理解したならば、手を引かれよ、自分もあまり気が長い方ではない」

「くつくくくつ、此処で引くのはできん相談じゃ。それにこの熊公は俺が仕留めた故、その肉も俺に食われたがつとるわ」

丈之助の左手とエルヴィンの右手がミシミシと軋みを上げ始める。表情は笑顔でもお互いに明らかに殺意に近い何かが湧いていた。

「はっはっはっ、いや、丈之助殿お戯れを」

「くつくくくつ、エルヴィン殿、俺に戯れなど無いがの」

「ごん、と二人の額と額がぶつかり合う。まさに一触即発。エルヴィンの部下である分隊騎士3人は完全に引いている。伸ばされた丈之助の左手を掴むエルヴィンの右手。均衡崩れぬこの状況の中、双

方がお互いの空いている片手をこの戦闘に参加させるといふ結論に至るまで、さほど時間はかからなかった。万を持して固く握られた双方の拳。それをお互い確認した丈之助とエルヴィンは不敵に笑い。

「わは」

「ふは」

笑い声と同時にお互いの同意の元に振り出される右拳と左拳。至近距離から放たれた鉄拳はお互いの顔面を仲良く粉碎するはずであった。しかし、お互いに拳が空を切る。双方の肩がこすれ合う程の近距離戦。それはお互いに必殺の拳であり、当然手応えがあつて然るべきであった。しかし結果は裏切られる。放たれた拳は虚しく空を切り、相手にダメージを与えることはかなわない。お互いの耳元でなつた風切り音に、一瞬間を空けてエルヴィンと丈之助は不敵に笑い出した。

「わはは」

「ふはは」

もはや肉のことなどなんのその、その場から二人共飛び退いて距離を取るやいなや、一撃必殺の威力を持った二人の拳遊びが、無邪気な子供のノリで始まった。傍から見れば楽しそうじゃれ合いだが、その実、繰り出される拳の風切り音がその危険性を物語っていた。しかも驚くべきことにその拳のスピードが上がり続けているのである。びゅん、という豪音からごっ、という重い風切り音に変化し、一撃の危険度が当たれば危ないから、当たるとヤバいに変化する、そして更に、当たれば死ぬ、の領域にさしかかるうとした時だ。

「……お兄様、私というものがありませんが、そんな何処のものともしれない冒険者の輩と親しくされるなんて、ううう……」

しくしく、となんと力も力の抜ける言葉が二人の間に降り注いだ。ふと声の方向を見やれば、そこには地に刺さったエルヴィンの槍の柄に吊るされているクレアがいたのであった。

「あー、……すまんクレア。忘れてた」

吊り下げられたままの恨めしそうなクレアの視線が、エルヴィンにじくじくと突き刺さるのであった。

第三話・宴席（後書き）

説明回をもう一回挟んで、次は街へと繰り出します。
そこでようやくストーリーが動きそうな予感。

第四話：依頼

「……食いも食いたり、満足じゃあ」

げふ、と息を吐いた後、丈之助は満足そうにごろんと寝転ぶ。そして膨れた腹をさすりながら丈之助は食後の至福を味わうのであった。成人男子五人の食欲、恐るべしとでも言おうか、ここ半年ほど人々を騒がせた賞金首は目出度く此の場にて完食されたのである。

そして、皆それぞれ満腹感の中体を休める中、エルヴィンはおもむろに丈之助の隣に座り込むのであった。

「ちよつといいか、丈之助殿」

そう語りかけたエルヴィンに、丈之助はかまわんよ、と相槌を打つ。それを受けて、エルヴィンは少し離れて座っているクレアを見やり、そして小声で丈之助に話しかけた。

「……どうだ、俺の妹は強かるう？」

おどけた表情でエルヴィンは言った。妹の自慢、そしてす僅かばかりの自重の感情。エルヴィンの言葉にはそのような意が含まれていた。そんなエルヴィンの感情を理解した丈之助はふむ、と頷く。

「粗いがの」

丈之助の返答は至極簡潔であった。クレアには、力は持てどそれを活かしきる経験が不足している。経験の浅さは戦法の粗さに直結し、そしてその粗さは戦いの場ではそのまま死に繋がる重大な弱点

であった。

「うむ、そういった意味で今回の丈之助殿との一戦は中々に貴重な経験だったろうな、丈之助殿には災難だったが、あいつも魔法を過信することもないだろう。改めて感謝せねばな」

はつはと、エルヴィンは丈之助に笑いかけた。そして丈之助が、それよ、と呟き体を起こす。

「その魔法とやらは、クレア殿が使った術のことよな？ あれはエルヴィン殿の国では誰もが使えるものなのかの？」

丈之助は山籠りの最中、師の人脈にて野試合を何度も行なっていたが、当然の如く、クレアの様な理外の術理を持って戦うものは居なかった。そして、クレアと合間見えてその威力を肌で感じた今、その使い手についての情報は実に重要なことだったのである。

「うむ、そうだな。使える程度に差異はあるが、国とは言わず、この大陸の全ての人間は何かしらの魔法は使えるな、……しかし、魔法を持ってして戦闘ができる五詠唱^{クインティプル}単位の使い手という点で言えば、そう多くない。おそらく千人に一人ぐらいであるうと言われているな」

「あー……、すまんエルヴィン殿。俺は学がない故いまいち分からんが、くいんてぶる、とは何じゃ？」

「ああ、濟まない。クインティプルとは詠唱、つまりは呪文というか前提に唱える文言の数ともいうべきかな、それが五章節。つまり五つの言葉を口に出さねば、魔法は発動しないのだ」

「ふむ、おそらくはクレア殿が長々と吟じていた歌のことよな」

「そうだ。だから魔法士は大体、詠唱時間確保のための兵士を確保しているわけだ。ついでに言えば詠唱単位が長ければ長いほど強力な魔法となる。五詠唱単位クインティプルで英霊級、六詠唱単位セクスタプルで精霊級、七詠唱単位セプタクルで神霊級と呼ばれているな」

「……なるほど、要は強力な魔法ほど、時間がかかると考えればよいかの」

「そういうことだ、それと精霊級、神霊級については気にすることはない。数十年から数百年に一度使い手が現れるかどうかで、更に戦闘向きの魔法の使い手に絞るとかなり人数は限られる。神霊級に至っては王族のみにしか現れたことがないから……。後は王族は王族で特別な魔法があるのだが、まあそれはいいか」

そうエルヴィンが、付け加えると丈之助はしばらく思索した後、うむと頷くのであった。

「ま、やりようはあるじゃろうな」

そう、呟いた丈之助の顔は実に楽しそうな表情であった。

「……さて、丈之助殿。丈之助殿はこれから何か当てはあるのか？」

「……ある様に見えるかの？」

丈之助の言葉にエルヴィンは頭を横に振った。

「丈之助殿は我々の目的は覚えてるか？」

「……あー、確か、この熊公の討伐じゃったか？」

「そうだ、まあ今回仕事を果たしたのは、丈之助殿だがな」

そしてエルヴィンはドサツつと寝転がる丈之助の枕元に、リガルドの左手部分を置いたのである。

「この街道をずっとあちらへ進むと、アクスというそれなりに大きい街があつてな、そのギルドにこの討伐部位を持ち込めば、それなりの報酬が入るだろう、毛皮も持って行くといい。ギルドで換金もできる。当座の資金にもなるし、おそらく宿も仕事もそこで見つかるだろう」

エルヴィンの言葉に丈之助は身を起こす。

「……ふむ。俺は構わんがの、エルヴィン殿はそれで良いのか？」

お互い気さくに鍋を囲んだものの。エルヴィンは丈之助の目から見れば武士階級であるように見えた。つまりは手柄を取らず面子は立つのかと、丈之助はエルヴィンにそう問いかけたのだ。そんな丈之助の気遣いにエルヴィンは破顔した。

「ふはは、気にするな、丈之助殿、これは元々我々の仕事ではない。今回の依頼はギルドの尻拭いみたいなものだからな、丈之助殿が討伐した方が要らぬ軋轢も産まずに済む。悪い話では無いんだ、……それに、俺がここに来たのも他に目的があつたからな」

そうエルヴィンは言うつと懐から書状を取り出し、それを丈之助に手渡した。

「先ほどアクスのギルドへの紹介状を書いておいた。これを見せれば丈之助殿の身分も証明されよう」

差し出された書状を受け取り、丈之助は多少訝しげにエルヴィンを見る。

「まあ、熊公をのしたのは俺じゃし、手柄云々は問題ないがの。……クレア殿とのやり取りは抜きにしても、どこの者ともしれぬ俺に、ここまで世話を焼いてもらうのも不可思議なものよのう？」

丈之助は元々世捨て人である。さらに言えば、今この場にいる人間は全員が金髪碧眼であり、黒髪黒目の丈之助は明らかに異物であった。エルヴィンはそんな丈之助の身分を保証し、これからの宿や仕事まで見つけるための手助けまでもするという。エルヴィンは悪者では無い。その点を丈之助は今までのやり取りで理解していた。共に食を囲み、遊び程度ではあるが拳も交えた。丈之助に取ってエルヴィンは、まだ全貌が見えぬ実力者であり、できれば貸し借りのない対等な関係でありたい存在であった。故に、丈之助はエルヴィンの申し出に対して、なんとも受け入れがたい感情が出てしまったのである。そんな丈之助の様子を見やり、エルヴィンは話を続ける。

「いや、丈之助殿、話はまだ終わっていない」

そして人差し指をピンと立て、丈之助に話しかけた。

「一ヶ月後、護衛の仕事を頼みたい。それが条件だ」

そう、エルヴィンが言った瞬間である。クレアが話しに割り込んできた。

「兄様！！ それは！！」

非難めいた視線を送るクレアを手で制し、エルヴィンは話を続ける。

「あらかじめ言っておくが、この依頼はかなり危険な仕事になる。十中八九魔法士との戦闘になるだろうし、その過程で命を落とす危険もある、だから断るなら断ってくれ。但し他言無用で頼む、その場合この紹介状は、この件について口外しないという事に関しての謝礼に当てて欲しい」

エルヴィンの表情は今まで丈之助と会話していたものとは違い、打って変わって真剣なものとなる。その意を汲み取り、丈之助は頷いた。そしてありがとう、小さくエルヴィンが礼を言い、そして未だ納得いかぬと不満を隠さぬクレアを後目に、彼は本題を口に出すのであった。

「実は、ある姫君を国外へとお逃ししたいのだ」

第四話・依頼（後書き）

説明回でござる。早くストーリーを転がしたい。

第五話：イプストリア王宮

ここ数年間、イプストリア王国はまさに権力闘争の真つ只中であつた。切つ掛けは至極単純なことである。王が倒れ、世継ぎがない。典型的なお家騒動の形である。通常世継ぎがないと言つことは、王に子ができないということなのだが、この世界では意味が異なる。世継ぎがないとは、現イプストリア国王に実子がないということを目指すのではない。『王の実子に五詠唱単位クインティプル以上の魔法が使える者』がないということなのだ。

というのも、この世界において王族が振るう魔法は特別だからである。

このミド大陸で、何故現四大国が大国でいられたのか。それは現大国の王族がこの世界における四大精霊の加護を強く受けていることに他ならない。この大地ができた時に精霊と対話をした神官の血筋であるとか、精霊に作られた原初の人の末裔であるなど様々な諸説があるが、真実は定かでは無い。定かでは無いが、現四大国の王族は今も確かに、目に見える形で四大精霊の加護を受けているのである。その加護とは何か。王族を王族として決定づける加護。

それは第三者を媒体としての魔法発動である。

例えばクレアの水の剣刃ウォルタ・ブレイズを例として上げてみるとしよう。水の剣刃ウォルタ・ブレイズはクレアの周囲に操作可能な水の刃を作り出す魔法である。クレアは詠唱と自らの魔力を呼び水に水の精霊イプスの力を借り、魔法を顕現させた。しかし、王族が水の剣刃ウォルタ・ブレイズを顕現させた時、それは効果が大きく異なる。実際、魔法は一人一人固有のものであり、同じ魔法を発現させるということはありませんが、今回その矛盾は

割愛する。王族が水の剣刃を発現させると、その王族の力量にも寄るのだが、周囲の人間も王族と同じように水の剣刃を使うことができるのだ。ウォルター・ブレイズ

ただでさえ圧倒的な攻撃力を持つ魔法士が、王族の魔法発動と共に量産されるのである。王族は一個にして強大な軍事力であり、そして国の象徴でもあった。もちろん王族魔法の用途は軍事力だけではない。用途により、治水などの大規模土木工事や大建造物建築などにも運用される。そして当然その力があるものと無いものではない。前者の方が強い。

水の精霊イプスの加護を受けるイプストリア、
火の精霊フューリーの加護を受けるグランセル、
風の精霊ウィルドの加護を受けるローラン、
土の精霊ゴルガンの加護を受けるゼルシュタッド、

これらの大国がこの大陸で抜きん出るのは至極当然のことであった。その様な背景があるイプストリア王国にて、王族に『王の実子クインティプルに五詠唱単位以上の魔法が使える者』がいないという事実はまさに一大事であった。過去、大国の歴史にて王族魔法が存在しない空白期がでた時期は初めてではない。しかし、空白期は圧倒的な軍事的アドバンテージが無になる時期である。それを迎えるとなれば国としてはそれなりの準備をしなくてはならない。

そんな中、イプストリア王国宰相ファウストの動きは素早かった。訪れる可能性が高い空白期というプレッシャーを逆手に取り、有力貴族達を取り込み、国力増強案を提唱し、一気に宮中を掌握した。現在、イプストリア王族の中で、未だ五詠唱単位以上の魔法発現のクインティプル有無がわからない実子はたった一人である。その一人に賭けるよりも、最悪他国家からの侵攻や、配下公国のイプストリア離脱は防が

なければならぬ論もそれなりに理があり、生活の安全を求める民衆達の支持も上手く得ていたのだ。

しかし、それは表向きの動きである。

実際のところ、今回のお家騒動の本質は宰相ファウストによるイプストリア王国の乗っ取りであった。彼にとって王族魔法を発動できる後継ぎがないという現実には実にチャンスであった。自分の息のかかった貴族の娘を国王の側室へと送るのはもちろんの事、現国王の食事に毒を仕込み、国王が倒れる原因を作ったのもファウストの手筈である。仕込んだ側室の子が王族魔法を発動すれば良し、万が一発動しなくても空白期に置ける王族の求心力低下を利用し、実権を握る。どちらに転んでもファウストの勝利となる手筈であった。

そして今、送り込んだ側室に男子が誕生する。誕生して直ぐに、魔法発動の兆しありとの報告を受けた彼は、最後の不安の芽をつぶしに歩を進めるのであった。目的の先はセーラ「ファラリス」イプストリア。未だ魔法発現の有無が解らない、十歳を迎えたばかりのイプストリア国王最後の実子の部屋であった。

ドアを開け放ち、ファウストはノックも無しにツカツカと歩を進めた。ファウストの手配で、部屋の入り口には護衛もいないし、彼女直属の親衛騎士も今は遠ざけている。宰相ファウストの歩を止められるものは今この場にはいなかった。現在、彼女には付き人のメイドが一人付いているだけである。メイド自身、ファウストに対して非難の声を上げようとしたが、セーラがそれを手で制する。そし

てファウストは慙懃無礼にもイスに座るセーラを見下ろし恭しく一礼をするのであった。

「クツクツクツ、セーラ様、この度はご機嫌麗しく」

「……まがりなりにも王族である私に対してのその態度、改めるといっても、もはや無駄ですのね」

ため息を吐きながら、セーラはファウストに答えた。

「……プツ、ククク、当然で御座いましょう、もはやこの国はこの宰相わたくしめ物なれば……、使い道のない王族などに何の価値がありませんか、ク……、ククク……クハハハハハハハ！」

ファウストは溢れ出す笑いを抑えきれず破顔する。彼の言葉は正しい。もはや名実ともに既にイプストリアは彼のものである。

「ならば、出てお行きなさい。この場に用は無いでしょう」

そういつてセーラはドアを指さし、促した。

「いやいやいや、僕は完璧主義者でしてな、いささか、気になる点が御座います……」

そう言つとファウストはセーラの両の手を制し、顔を近づけた。その行為にセーラ直属のメイドであるリタが叫ぶ。

「無礼者、誰か、誰か……！」

しかし、ファウストはリタを一瞥するだけだ。

「クツクツクツ、誰も来るわけ無かろう……、賤のなっていないメイドだ。……ご主人様は理解しているようだがな？　ん？」

そして、セーラの両腕を持ったまま、再びファウストは視線をセーラに向けた。

「なあ、セーラあ、貴様、何を企んでる、ん？　何故この私の邪魔をしない。何故静観を貫くのだ。今となつてはお前が王位につくことなど無い、国王も毒で直に死ぬ、さあ言ってみる、貴様、何を隠してる？」

「あら、何のことですか？」

セーラの眼前でファウストが凄む。しかし、セーラは毅然とした表情を崩さずに答える、しかも余裕の笑顔のおまけ付きである。それは、父へ毒を盛られ、生まれ育った国を乗っ取られ、莫大な権力を持つ宰相を前にして、十歳の少女ができる王族としてのささやかな抵抗であった。

「聡明なお前の事だ、僕の乗っ取り工作など直ぐに気づいていただろう、何故王族派の貴族を引き入れ、抵抗しなかった？　何故、無駄であるうと毒殺の嫌疑を私にかけなかったのだ？　実証できるかはどうかあれ、速やかに事は運ばなかったものを」

「……貴方のことは大嫌いですが、国を乱したくないという気持ちは私も持っていましたから、貴方の場合は『弱った国を乗っ取つても仕方が無い』なんて下衆な理由でしょうが、確たる証拠もない状況で国を割るほど私は愚かではありませんのです、疲弊するのは民衆です。　もつとも、毒の件はただ気づくのが遅かっただけですわ、決定的な証拠を押さえる前に貴方にもみ消されましたでしょ

う？ 私が自重したお陰で貴方の掌握が早くなり、それが仇となる
とは、私もついておりませんでしたわ」

そう、淀みなく答えたセーラに、ファウストは、ふん、と息巻く。

「 3日前だ、大規模な魔力遷移が確認された、貴様の発動とは
考えにくい、……まあいい。貴様が五詠唱単位の魔法を発動しよ
うとしまいと、「レクシオン」 儂の座は盤石だ。どうだ、今からでも素直になれば、
儂の妾「レクシオン」ぐらいにはしてやるぞ、クハ、クハハハハハ！！」

未だセーラの両の手を掴みつつ、笑い続ける宰相。

しかし、傲岸不遜な彼かの仇敵に対して、セーラはあどけない困り
顔でファウストに語りかける。

「ねえ宰相。 息が臭いわ」

そのセーラの言葉にファウストの笑いがピタリと止まった。見れ
ばファウストの表情が能面の如く無くなっていた。これがイプスト
リア王国宰相ファウスト「オートマタ」、グラウベルの本性の一端であった、権力
以外何も興味が持てない機械人形。この時、セーラがこのファウス
トに対して悲鳴を上げなかったのは実に奇跡的なことであった。

そしてファウストは無言で顔をセーラに近づけると、侮辱の報復
とばかりに、その舌を伸ばし、セーラの右頬をぬらり、ぬらりと舐

め上げるのであった。その気持の悪さ、気味の悪さにセーラはビクンと一瞬体を震わすもののそれ以上の反応を一切外へと出さない。

その間、数分か、それとも数十秒であったか、ついにセーラの両の手が解放される。ファウストはセーラの頬から垂れる自分の唾液を満足気に確認すると、くるりと踵を返し、ドアに向かっていくのであった。

「……ごきげんよう、宰相。もう、おいでにならないで下さいね?」

自由になった手で、セーラは血がにじみ出るほどドレスの裾を掴み、最後まで弱みは見せまいと、気丈に振る舞うのであった。

第五話：イプストリア王宮（後書き）

おまわりさん、こいつです。

2011/09/26 誤字訂正しました。拍手でのご指摘感謝です。ちょっと自分、推敲に手を抜き過ぎました。以後精進します。

第六話：弱者と強者

イプストリア王国は大陸南東部に広がる大国である。北側は大陸中央を流れるイクス大河を国境として、風の大国ウィルドと大きく国境を面している。イクス大河付近の東側は豊富な鉱石や木材の産地であり、西の河口は重要な食料の生産地であった。西の鋼材は東へ、東の食料は西へ。自然と発達した河川輸送により、自然とその経済はイクス大河の中間点へと移動していった。その地名の名前はファラリス。後に商業都市呼ばれるほどの発展を遂げる小さな都市であった。

二百年前のことである、イクス大河の交易権、つまりはファラリスの覇権を巡ってイプストリアとウィルドが大河を挟み、戦争が起きた。十年続いた長き戦いは、両国を疲弊させ双方の国力を著しく消耗させた。当時の王、ラーゼン・ヴァン・イプストリアと、ヴァルガノ・ゼノ・ウィルドは戦争集結において、この交易拠点商業都市ファラリスを中立な公国として成立させ、お互いに王族を一人ずつ拠出することを条件とし、互いの鋒を収めたのである。

以来、ファラリスはウィルドとイプストリアという二大国の庇護を受け大いに発展することになった、そして戦争で疲弊したウィルドとイプストリアの国力回復に尽力し、商業国として目覚ましい成長を遂げていったのである。

セーラの母はそんなファラリスから側室としてイプストリア国王に入った身であった。セーラの母は体があまり強い方でなく、セーラを産んで程無くその人生を終える。そして、物心付かぬ頃に母を失ったセーラは父である国王に傾倒していくことになる。父である王は、賢王と呼ばれた現イプストリア国王、ルイス・ヴァン・イプ

ストリア。成長するに連れて、セーラは彼の政道を次第に学ぶようになっていった。ルイスもセーラの聡明さの片鱗を感じ取っており、特別な教育環境を整え、英才教育を施していった。そして、それはセーラにとってかけがえの無い絆へと変化する。セーラにとって、学問は父との唯一の繋がりをもてる絆であった。

イプストリア国王には正室、側室の子合わせて20を超える実子がいた。クインティブル五詠唱単位以上の魔法発動できる子がいない今、彼らは王の後継ぎとして、互いに競い、そして争いあう関係であった。母や兄妹のいないセーラは王宮では孤独である。だから、セーラは数少ない王との謁見時は、なるべく父と多くの事を語るべく、時を学問に費やした。子供らしからぬ生意気な意見を出した時など、それにルイスが目を丸くし、にこやかな顔で、『ではこれではどうだ』と返してくることに、セーラは確かに幸福を感じたのだ。セーラが九歳の頃にもなると、ルイスとセーラの会話は酷く高レベルなものになり、国策はもちろん外交も交えた一大政治論が展開されていたのである。それは誰にも邪魔されることの無い、二人だけの時間であった。

その中で、当然今回の空白期についてもセーラとルイスは話をしていた。

今のままでは、間違いなくイプストリアの次代は空白期が産まれること。

跡目争いが激化すること。

当然、王族同士や重臣が派閥を作り、争いが起きること。

そして、ルイス自身の命が誰かに狙われる可能性があることである。

自らが権力を握るのに一番邪魔であるのはライバルの王族でも重臣でもない。それは現王族魔法唯一の使い手であるルイスである。

ルイスさえいなくなれば、誰もが平等なスタートラインに立ち、実権獲得へ向けてのレースを大っぴらに行うことが出来るからだ。そして、権力ちからを手に入れるのであれば早いほうがいい。そう考える輩は必ず出てくる。それがルイスの見解であった。

「セーラよ、未だ発現が分からない振りをしているが、お前は魔法が使えないのだろうか？」

それはセーラがルイスに最後に謁見した時の彼の言葉である。セーラはルイスの言葉に静かに頷いた。

「セーラ、誰が実権を握ろうと国を割ってはならぬ」
「はい、父様」

「魔法が使えないことは、ギリギリまで隠しなさい。それがお前の身を守ることになる」

「はい、父様」

「お前は私の子の中で一番できた子だ。次の王が誰になるかはわからんが、正しき者が王となるならば、補佐をして上げなさい」

「はい、父様」

「そして、悪しき者が王となるならば……」
「……」

ルイスの言葉は予想できた。だがそれはセーラに取って最も選択したくない道であった。

「この国を捨て、ファラリスに逃げなさい」

実権を取った者が己が権力欲を抑えきれぬ者で在るならば、敗れた王族はおそらく殺されるか一生幽閉の身である。ルイスは、才能溢れるセーラにそのような道を歩ませたくは無かったのだ。しかし、それはセーラにとっては、殺される可能性を持ったルイスを見殺しにして、国外に逃げだすという選択である。

「…………嫌です。父様、それは嫌。…………父様を見捨てて逃げるなど、私には出来ません」

セーラの口調は平静であったが、その目には涙が溢れていた。いくら知識をつけたとしても、いくら大人ぶっていても、セーラはまだ十歳にも満たぬ子供なのである。そんなセーラをルイスは優しく抱きしめた。

「お前は本当に頭の良い子だ。だから私も少し調子に乗ってお前に教育を施したが、…………それは正解だったと確信するよ。私を氣遣ってくれている気持ちも本物だ。そして、フアラリスへと逃げる事が一番安全ということも、理解している」

「嫌です、…………嫌あ、嫌あ…………ッ」

ルイスの言葉は正解である。父への敬愛、自らの安全、自らの願いと、取るべき道。どちらも本物であることを完全に理解しているセーラは取り乱すことができない。本来なら泣きじゃくり、父の胸を叩き、存分に甘えても良い年頃なのだ。言葉での拒絶は現在のセーラが唯一できる抵抗であった。せめて自分が五詠唱単位クインティプル以上の魔法発動を出来ていたら、と心の中で歯噛みする。

だから、ルイスはただ、セーラを抱きしめた。そんなセーラの心情を理解して、せめてその気持が少しでも和らぐようにと。

「セーラ。まだ子供のお前にそんな顔をさせてすまない。だけど、私の願いはお前が生きることなんだよ」

ルイスはそうセーラにさとすように言葉をかけると、ゆっくりと彼女の頭を撫でてやるのであった。

どれほどの時間が経ったであろうか、セーラはルイスの胸をそつと押し、距離を取る。顔を上げたセーラは、既に王族の顔であった。それを確認したルイスは満足気に頷いた。

「護衛を手配しておこう、お前の一存で動かせる騎士分隊だ、後で会うが良い」

「……はい、ありがとうございます」

その言葉に一礼をし、くるとドレスを翻し、部屋を出ていくセーラ。

「さようなら、父様」

そつと呟き、セーラは扉を閉める。父と子の別れはこうして済まされたのであった。それは王族として、実に相応しい別れだったのかもしれない。唯一の過ちが在るとすれば、この別れはセーラにある種の呪いをかけたことである。セーラとルイスのやり取りは王族としては相応しいものの、父と子の別れとしてはあまりにも建前が過ぎた、歪んだ別れだったからである。

現イプストリア国王、ルイスⅡヴァンⅡイプストリアが倒れたのはまさにこの二週間後である。

「ファウスト様、よろしいので？」

側近の言葉にイプストリア王国宰相ファウストは、なんのことだ？ と問い返す。

「セーラ様のことでございます。どうやら手駒の騎士をアクス方面へ向かわせたとのことですが、おそらくファラリスへの亡命の下見かと思われませう。放っておいても良いのですか？」

側近の忠言を受けて、ファウストは低く笑いを漏らす。そして一言。放っておけと吐き出すのであった。

「……しかし、万が一魔法発動」

することがあれば、という側近の言葉は続かなかった。ファウス

トの表情が変化したことを確認した側近が直ちに口をつぐんだからである。そして、クツクツクツと宰相が笑い出す。

「心を折るために一番大事なのはな、精神的に追い詰めて、肉体的にも追い詰めて、徹底的に追い詰めた後に、すぐるような希望を与えてやるのだ、そして、あと一步の所で、その希望を取り上げてやるのがポイントなのだよ、クツクツクツ、……………」

実に楽しそうに愉悦を漏らすファウストを見て、側近は背筋に寒気を感じるのであった。

「クツクツクツ、逃げさせてやれ逃げさせてやれ。国境手前で、護衛の騎士共を殺し、城まで引つ立って、伏した父親の前で存分に闘ってやるわ……。あの小生意気な娘がどんな鳴き声をあげるのか楽しみでならん、そういえば、激しい感情の波は魔法発動の引き金になるとも言われてるな、それで魔法が発動すれば儲けものだ。しっかりと調教してやるわ！！　ワハハハハハハハ！！」

そう、万が一セーラが五詠唱単位以上の魔法発動をしてもしなくても、自らに屈服させることで自分の願いは成就する。宰相ファウストにとって、セーラ存在はもはや自らの権力成就の仕上げとなる要となっていた。屈服させればよし、最悪殺してしまえばいいのだ、と。

エルルド街道を東南方面に進む騎士分隊がいた。彼らは何れも騎乗しており、三名が先行し、その後ろに二名という隊列で急ぎ馬を走らせている。

「兄様、本気なのですか？」

後方左側、クリアが隣を走るエルヴィンに話しかけた。

「ああ、今回俺はその為にお前についてきたんだからな」

.....

三日前に観測された大規模な魔力遷移。未だ魔法発動ができないはずであるうせーラが予見した、魔力遷移である。そして、その先に確かにいた異物。

.....

そして丈之助と話をした時、エルヴィンは確信したのだ。

丈之助は朝霧と共にやってきた。朝霧、つまりは水。

せーら、丈之助、そして水の精霊イプス。

この出会いはきっと運命をも変える事ができる歴史的な分岐点である。

そして、エラルド街道を北西方面へと歩く一つの影。
桐生丈之助を巻き込んで、この世界の情勢は大きく動こうとして
いた。

第六話・弱者と強者（後書き）

警察様、出番でございませう。

第七話：アクスへ？

丈之助が目指すアクスは、この大陸の東側の商業の要であるファラリスと各都市を結ぶ中継点の役割を果たしているわりと大きな街である。大陸東の物流は例外が多少あるものの、ほぼ全ての物資がファラリスへと集められ、そしてファラリスから出ていく形で営まれている。東西の流通は河川輸送で担い、南北の流通はファラリスから放射状に整備された街道を使い、陸路にて物資の輸送が行われているのである。

丈之助とエルヴィンが出会ったエラルド街道は、アクスを通じてファラリスと王国首都のイプストリアを結ぶ重要な街道であった。手配魔獣であるリガルドの出現により一時的に通行制限がしかれていたものの、普段は荷馬車や行商人でこった返している賑やかな街道であるのだ。

しかし、数ヶ月に及ぶ通行制限は当然街道を過疎化させる。イプストリアへ通じる道はエラルド街道だけでない。僅か数日のロスと命は天秤にはかけられない、それは商人として当然の考えであった。

ところが、この広い世界。御多分にもれず例外というものが存在する。

「例えば、通行制限なんてことを知らねえでひよっこり街道を通る商人とかよ」

丈之助の目の前にいる男達の一人が言った。その手には抜き身のショートソードが握られている。そして丈之助を囲むように、同じような身なりをした四人の男たちが品悪く笑い声を上げている。彼

らの後ろには手足を縛られ、猿轡を噛ませられてもがいている商人がいた。

「あとは俺たち見てえなろくでもねえ奴らとか」

と、そこまでショートソードの男が言ったところで、弓を持った男がその言葉を遮った。

「あんたみたいに事情を知らねえド田舎者とかだな！」

どっ、と丈之助達を囲む男達から再び笑い声が上がった。ちげえねえ、だの、今日は大漁だ、などの声が丈之助の耳に届く。そしてひとしきり笑った後、ショートソードの男は丈之助に剣を突きつけた。

「ったく、ここまで来て逃げたり喚き散らさねえ度胸はすげえもんだ。それともチビって小便漏らしそうなのか？」

にやにやと、男は丈之助に突きつけた剣先をプラプラと揺らしながらいやらしく笑いかけ、

「……手エ上げる、荷い下ろしな」

そして、男はこれまでとは打って変わって低く、冷徹な声で最後通告を出した。沈黙を続ける丈之助に、男はため息ひとつ。何気なく突き出されたその剣先が、無慈悲に丈之助の体へと沈み込む。

その商人にとって今日は正に厄日であった。久方ぶりにアクスへ来たはいいものの、目当てのものは無く、その足で王都へ向かおうとエラルド街道を行けば盗賊にかち合う始末である。通行制限がでていたというのも寝耳に水である。何故街道を出る時に警備の騎士は自分に忠告をしてくれなかったのか。なぜ、道行く人は自分に教えてくれなかったのかと、商人は彼らを恨んだ。先だってエラルド街道を出立した一団はやけに厳重な警備を引き連れていた。せめてあの時に気づいていればと、商人は悔やんだ。そして今、商人は今手足を縛られ、篋巻き同然の状態で地べたに転がされているのである。

商人の希望は今がまだ夕刻であるということであった。いくら人通りが少ないとはいえ、巡回の警備騎士ぐらいは回っているはずである。その時に助けを求めるのだと、商人は心に決めたのであった。

ところが、通りかかったのは黒髪黒目で見たことのない風貌の旅人である。体格はそれなりによさそうに見えたが、さすがに武器を持った集団には分が悪そうに商人には見えてしまった。現にその男はあつさり盗賊たちに囲まれて刃を突きつけられてしまっているのだ。そして、盗賊の一人が商人への耳元で呟いた。

「……大人しくしてな、お前にはまだ使い道があるからよ、だが、いい機会だ。俺らに逆らえばどういうことになるのかを見せてやるよ」

商人は戦慄した。この盗賊たちは自分に恐怖を植えつけるためだけに目の前の旅人を殺すつもりであることに。そしてこの残酷な男たちは、これから自分にどの様なことをさせようとするのだろうか。自分も不幸なら、あの旅人はもっと不幸だ、なにせ、こんな不幸な自分の為に殺されてしまうのだから、と。

そして、商人はせめてその瞬間だけは見たくないと、丈之助から目をそむけるのであった。

ぐち、と何か柔らかいものを潰した様な音。そしてゴキリ、と鈍い男が商人の耳に届いた。

おそろおそろ商人が目を開けたそこには、丈之助の前に崩れ落ちるショートソードを持った盗賊の男の成れの果てがあった。その意外な結末に、仲間をやられたはずの盗賊達も呆然としている始末である。みればショートソードをもった男の片目は潰れ、首があらぬ方向へと曲がっていた。

「なんと、お主らは野盗、山賊の類であったか」

そして彼らを現実に戻したのは、丈之助が発したその言葉であった。

「いや、クレア殿のこともあったからの、てつきり挨拶がわりに手合わせをするのがこの国の風習かと思っってしまうわ。わっはっはっ」

ひとしきり笑ったあと、丈之助は盗賊たちを見回した。そして動かない彼らをまるでじゃれる幼子へ父親がかかる言葉のように。

「ん？ どうした。かかってこんのか？」

「なめやがって！！」

盗賊の一人が剣を抜き放ち、丈之助に切りかかってきた。片手上段から丈之助の肩口から袈裟懸けにロングソードが切り下ろされる。それに対して丈之助が選んだ答えは至極単純であった。剣戟を躲すのではなく、踏み込む。狙いは振り下ろされる柄頭。丈之助の右腕が振り下ろされる剣を腕ごと止めた。対武器の選択肢は躲すだけが能ではない。踏みこむことで増える選択肢もあるのだ。同時に崩れ落ちる盗賊の男。見れば丈之助の左足が男の股間を粉碎していた。

崩れ落ちる男の向こう。丈之助の死角から矢が放たれる。それは素人目に見ても回避不可の攻撃であった。弓を放った男と丈之助の間は僅か数メートル。矢が丈之助に到達するまでほんの数瞬である。しかし、弓の男は信じられないものをそこで目撃した。

ぱしん、という乾いた音。そして、ずっ、という刺突音。

放たれた矢は丈之助に捕らえられ、間髪入れず丈之助の脇で槍を構えていた男の喉に突き刺さっていた。

「……な、なんだよお前、なんなんだよお前……」

弓の男が下がりながら矢をつがえようとすが、手が震えて思うように矢をつがえない。弓の男は近づいてくる丈之助から逃げようと焦っていた。しかし、弓の男のその目に希望の光が灯る。丈之助の後ろには今まさに彼の後ろから斬りかかろうとする、仲間が見えたからだ。

その組織性である。飽和した攻めや波状の攻めに対して丈之助は対向する術を今は持たない。

「なれば、此れも俺を狙った因果よ、恨んでくれるな」

丈之助は逃げ出した男を仕留めるべく、追走するのであった。

商人は呆然としていた。目の前で起きた事が信じられなかったからだ。これは何の夢かお伽話の類であったか。気づけば自分のピンチに現れた旅人があれよあれよと盗賊共をなぎ倒し、そして今、自分の荷をゴソゴソとあさり、アキア産の高級腸詰めを目ざとく見つけ、ムシャムシャと咀嚼をしているではないか。

「……って、それは私の商品だー！！勝手に食べるなコラー！！」

自分の安全が確保できればなんのその。命の次に大事な商品を守るべく、商人は簀巻きの状態ながらもびっこちと打ち上げられた魚の様にアピールを重ねるのであった。もちろん、猿轡を噛ませられているのでその声は丈之助には一切届いてない。

「ふむ、なんじゃお主も食いたいのかの」

商人の簀巻きすまきの舞を、自分もよこせと解釈したのか腸詰めを持って丈之助が商人へと近づいてきた。そして商人に噛ませられている猿轡さるなまを外した時だ。

「あーっ 一箱しか無いのに！ もう半分も食べちゃってる！ 酷い！ 王都に持ってけば金貨10枚は固いのに！」

「ふむ、そうか。アイツらは存外に金持ちの野盗共じゃったんだのう？」

「ちーがーうー！ その荷馬車も、中身の荷物も全部私んだってば！」

びちびちと跳ねる商人に、丈之助はため息を付いた。

「なんじゃ、お主、女子おなごじゃったか」

「言うに事欠いてそれがコンチクショー！！」

一際激しく跳ねると商人は、ゼーハーゼーハーと激しく息を乱し、力なく横たわるのであった。

「……ごめんなさい、助けていただいて有難うございます。お礼にその腸詰めは差し上げます。あと枷を外していただけると助かります」

ひとしきり暴れた後、息を整え、我に返った商人は、商人は力なく丈之助に懇願するのであった。

「うむ、最初からそういえばいいのよ、わかり難くてかなわん」

丈之助は商人の簀巻きを解きながら、やれやれと呟いた。

「そうですね……、本当だったら積荷全部取られて、犯されて、最後に奴隷市場に叩き売られるなんて普通にありえた展開でしたよね……、ああ、ありがとうタイプス様、巡り合わせに感謝致します」

そう言って祈りを捧げる商人に、丈之助はクレアといい、この商人といい、この国の女子は奇妙な輩が多いのかと首を傾げるのであった。

「……それで、お主はどうするんじゃ？」

腸詰めの箱を空にした丈之助は商人に問いかけた。

「……アクスへ戻るわ、安全が確保できるまで引きこもるわよ、……まったく、大赤字だわ」

そして丈之助はにんまりと笑う。

「奇遇じゃの、わしも行き先はそのアクスとやらじゃ」

それを受けて商人は、なによ、とジト目で丈之助に返す

「いやの、道中の安全、そこの美味そうな燻製肉で手を打つてもよ
いがの？」

丈之助の視線の先には肉厚のハムがずらりと並んでいた。

「……よりもよって、コルギュー産の燻製なのね、さっきの腸詰めとまでは行かない迄もそこそこ値が張るわよ……」

「……命とどっちが高いかのう?」

「あー、もうわかったよう、そのかわりしっかり守ってよね!」

「重畳重畳、では早速いただくかの」

そういつて二の腕はあろうかという肉の塊に丈之助は旨そうにかぶりつくのであった。

「あんた、あんだけ腸詰め食べておいてどついう胃袋してるのよ…

…」

そして、荷馬車の点検と、馬の準備を終えると、御者台に座り、商人は丈之助に向かって話しかける。

「それじゃ、出発するわよ、えーと、」

「丈之助じゃ、丈の字でもよいがの」

「……どっちも呼びにくい、ジヨーでいいわね」

そう言つて商人は、ばん、ムチを馬に当てる。ゆっくりと荷馬車が動き出した。

「私のことは、エレン、て呼んでね」

馬車は一路アクスへと向かうのであった。

第七話：アクスへ？（後書き）

活きの良い魚、エレンさん。

ちなみに丈之助さんへの恋愛フラグは立ちません。

何故ならこの小説の登場人物はまともな性癖をしていないからです。

彼女の性癖は待て次々回！

第八話：アクスへ？

「ほー、なんとまあ、異国の街とはでかいものよのう……」

アクスの街並みに立ち並ぶ建物とごった返す人々を見て、呆気に取られていた丈之助が初めて出した言葉がそれだった。

「あんた、ホント田舎から出てきたのね、中継都市としてはアクスは大きい方だけど、フアラリスとか王都なんかはこの比じゃないんだから」

と、丈之助の横を歩くエレンが多少呆れた表情で言葉を返す。

「ふむ、関ヶ原を出てからはずっと山生活であったからの、田舎というよりかは俺は野人に近きものぞ。そこに期待されても困ってしまうわ。はっはっは」

と、のたまう丈之助に、エレンはだめだこのおっさん、と大きく吐き出すのであった。そして、尚もすたすとエレンは丈之助と同じ方向に歩いて行くのである。

「……それでな、お主はどこまで俺についてくる気なのかの？」

「とりあえず、しばらくかな？ 特に急いでやることもないし。ジヨーはギルド行きたいんでしょ？ 道案内するわよ？」

と、ばんばん、とエレンは丈之助の肩を叩くのであった。しかし、その心のなかでは、

（黒髪黒目？ 見たことないわよそんな人間。異様に強いし、もし

かしたら掘り出し物でも持っているかも……、うん、……匂うわ。
お金ちゃんの匂いがッ！ プンブン匂うわーッ！)

とほくそ笑んでいるのであった。もちろん、その笑みが心のフタからにじみ出て、実際の顔に出てしまっていることなど、本人は気づくよしも無しである。

「お主、商人には向いていないのではないかの……」

丈之助の素直な感想にエレンは何いつてんのよ、と、軽く憤慨するがその後すぐにギルドを見つけたようで、ちよいちよいと扉を指さし、丈之助に促すのであった。

「ほら、ギルドはここよ。ささつと用事すませちゃいなさい」

そんなエレンを見て、前途多難な商人の行く末を案じながら、丈之助はギルドの扉を空けるのである。

アクスの冒険者ギルド内の1階は酒場兼待合所となっていた。用途が用途だけに、かなりの広さが取られている。そして部屋の右奥。居並ぶテーブルとイスの奥にギルドカウンターがあり、反対側の左奥にはバーカウンターが敷設されている。さらにその奥には調理場が設置されていた。

流通の中継地点であるアクスに置けるギルドの役目は道中警備を始め、取引の争いや揉め事の仲裁、希少動物のハントや手配魔獣の討伐など量も質も多岐に渡る。必然的に様々な人種が出入りする形になり、それに対応するため、仕事の依頼と待合が同時に出来る形

が取られていた。そして、2階はギルドに加盟した冒険者達の仮宿として、雑魚寝の大部屋から個室までの宿泊施設が整えられているのであった。

そんなアクスギルドの待合酒場では、未だ通行制限の解かれぬエラルド街道の話題と、その原因となる手配魔獣リガルドの事であった。代替の街道があるといってもエラルド街道は王都とファリスを結ぶ要所中の要所である。可能であるのならばいち早く治安を取り戻したい場所なのである。商隊を組める大商人は問題ないが、取引の8割を占めるのは小所帯の商人たちである。彼は警備を雇う余裕もそれほど持たないし、なにより彼らに雇われるクラスクインティブルの冒険者など、正にリガルドの格好の餌食でもあった。また、五詠唱単位の魔法が使える冒険者も数が多いとは言えず、解決の糸口を見出すことができないアクスギルドは、面目関係なしにリガルドの討伐を王国騎士団へと依頼したのであった。

そのような背景があり、各テーブルでは名を上げるチャンスとして我そこはと息巻くものや、集団で山狩をすべく計画を立てている者、そして王国はまだ動かないのかなと愚痴る商人達など、まさにエラルド街道についての話題が騒がれていた。

「へー……、そんな事になってたのねえ。そりゃ通行制限もしかれるわー……、てかジョーもよく襲われなかったわねえ、リガルドつてリガルドベアの異常体でしょ？ 魔法士でもいなきゃ絶対無理だわー……」

ギルドカウンターへと向かう丈之助とエレン。近くのテーブルの話を目ざとく盗み聞いたエレンがそう呟いた。

「そうかの、まあ確かに強かったがのう？ しかし、旨そうなモノ

が揃っておるな、実に興味深いの」

テーブルに居並ぶ酒と料理を眺めながら、のほほんと丈之助が答える。

「ってジョー。あんたあんだけ食べてまだ足りないの？ ……というかもしかしてリガルドと遭っちゃったの？ よく生きてたわねー、魔獣の異常体って耐久力がえらく強くなってるから、首の骨でもネジ折らない限り、矢が突き刺さるうが槍で貫かれようが平気で向かってくるって言うし、……ほんとよく逃げられたわね、あ、もしかして河にでも飛びこんだりでも」

エレンの言葉を遮り、鈍い音がごん、とギルドカウンターへ響く。人の胴回りはあるうかという獣の手。そして真紅のように赤く染まった小指の爪が鈍い光を湛えていた。

「りがると、とかいう熊公を仕留めたでの、報酬と宿の手配を願えるかの？」

呆気にとられる受付のギルド員。それは後ろで口をぼかんと開けているエレンも同じである。そして、カウンターの周りで雑談をしていた冒険者達も同じような顔をしていた。

「そうそう、騎士団のエルヴィン殿からも書状を預かっておったな、必要じゃと言われたが、よく解らぬ故これもな」

受付のギルド員は言われるままに手を差し出し、エルヴィンの書状をみる、そこにはまごう事無き、騎士団の分隊長以上が持つ特印が押されていた。

「えーと、あ、はい、ね、念のため照合してきますね」

と、受付のギルド員がその席を立ったときである。

「はあああああああああああああああああ！？」

エレンと、周囲の冒険者と、その他その騒ぎを見守っていた人が一斉に叫び声を上げたのであった。

「なにそれ、聞いてない！！」

とエレン。

「聞かれなかったからの」

と、丈之助。

そしてやいのやいのと騒ぎは大きくなり、ギルドカウンターの前にあつと言う間に人だかりができてしまった。

「うお、マジか、本物かよ！！ 手でけえ！！」

「こっちは毛皮か、でけえ！！ てか臭え！！」

「すげえ分厚いなおい、こりゃ鞣なめしゃいい毛皮になるぜおい！！」

「おう、あんたすげえな、一人で仕留めたのか？ 見慣れねえ風貌だが魔法士だったりするのかい？」

「あんちゃん、あんちゃん、得物は何使うんだ？ 修理なら任してくれ、いい腕してるぜ？」

「冒険者でも魔法士っているんですね、どんな魔法で討伐したんですか？」

矢継ぎ早に浴びせられる質問に対して、丈之助は面を喰らってし

アクスの今日の夜は長い。そう、歓喜の宴はまだ始まったばかりなのである。

「お帰りなさい、エルヴィン、クレア。エラルド街道はいかがでしたでしょうか」

イプストリア城内、セーラの自室にて、エルヴィンとクレアはセーラに報告を行っていた。

「はい、セーラ様の感知通り、確かに『何か』は居りました」

そして、エルヴィンはセーラに力強く語りかける。

「ご安心ください。彼は、丈之助はきつと姫様の力となるでしょう。間違いございません」

エルヴィンの言葉に、セーラは俯いた。

やはり、自分はこの国を捨てなければいけないのかと。

やはり、父親を捨てて逃げなければいけないのかと。

「セーラ様、ご決断ください。我ら兄妹もファリスの出身。あの宰相にセーラ様が慰み者にされるなど見たくはありません」

そう、クレアが深刻な顔つきで語りかけてきた。

父は逃げるという。しかし、セーラの本心は父を置いて行きたくないと願う。自分の為に身を削って尽くしてくれるエルヴィンやクレアも逃げるといふ。しかし、あの宰相が易々とファリスへと逃がしてくれるわけが無い。逃げればエルヴィンにもクレアにも危険は等分に振りかかるのだ。行くも苦難、しかし、留まってもジリ貧である。

セーラの心は雁字搦めに縛られていた。今、彼女の思考を動かしているのは王族としての矜持だけである。

なれば。

王族の矜持に従い、水の精霊イプスの導きがあつた場所へ行くべきである。それが十歳の少女が取りうる唯一の選択肢であつた。例えその選択肢が誰かに握らされたものであつたとしてもだ。

「分かりました。いきましよう」

そのセーラの力強く頷いた笑みは、仮面の表情である。

しかし、エルヴィンも、クレアも、一番近く長く仕えているメイ

ドのリタも、彼女の本心を理解することはなかった。おそらくは、この場に父であるルイス王がいても である。

今のセーラは王族であるが故に、孤独な持たざる者なのだ。

第八話：アクスへ？（後書き）

次回、再会。

城組とアクス組が合流。

そして、宰相へんたいがいよいよ動きます。

さあ、その後は一章最後の見せ場となります、決戦の始まりです

第九話：再会

アクスから王都イプストリアまでの安全が確認され通行制限が解除されると、エラルド街道は瞬く間に活気を取り戻し、商人や旅人で溢れるようになった。同時に誤った情報であるが、リガルド討伐を単独で成し得た「黒髪の魔法士」桐生丈之助の存在がアクスを中心に広く語られることになる。

アクスの東南門に一人の男が佇んでいた。黒髪黒目、上半身は袖を七分に切った麻色の道着に下半身は濃紺の裾を絞った袴を身に付けている。長く伸びた黒髪は後ろで一つに纏められ、ゆらりゆらりと風にたなびいていた。今やアクスでは知らぬものは居ない、桐生丈之助その人であった。

その丈之助の前に一台の馬車が止まる。馬車には御者が一人そして王国騎士四人ほど警備をしている。最前で先導をしていた騎士が下馬し、丈之助へとすたすたと歩み寄る。

「丈之助どの、久しいな」

笑顔で腕を差し出したのはイプストリア王国騎士団の分隊長であるエルヴィンである。

「うむ、エルヴィン殿も変わらずで何よりじゃの」

と、差し出されたエルヴィンの腕に、こつんと丈之助は己の腕を合わせるのであった。そして丈之助は残りの面子に向き直る、彼らは全員リガルド討伐で出会った面々であった。知らぬ顔は居ない。丈之助が各々に声を掛け、クレアを見やる。クレアはバツが悪そう

に顔を背けるのであった。

「はっはっはっ、クレア殿は相変わらずじゃの」

その様をみて丈之助は結構結構と、大いに笑うのであった。

「しかし、丈之助殿、妙にというか、日も浅いのにかなりこの国に馴染んだな……」

そう感心するような声を上げたのはエルヴィンである。それは丈之助の身なりを見てのことだった。

「うむ、良い商人に世話をしてもらってな、特にこの『ブーツ』とやら、中々疾駆けなどに便利だな」

無邪気にアクスで新調したブーツを見せる丈之助。横でクレアがまるで子供ですね、と呟く。エルヴィンと出会った時と変わらず丈之助の身なりは基本的に道着に裾を絞った袴であったが、ところどころ丈之助の装備が変わっていたのである。黒髪黒目の丈之助は未だこの世界では異物であったが、それでもエルヴィンに馴染んだ、と言わせるだけの変化があったのだ。

まずは足。頑丈な革で編まれたブーツである。そして腕、こちらも動物の革を幾重にも重ねた革の手甲が付けられていた。前腕部から拳頭までカバーしている大仰なものである。拳頭部分は一部が手袋状になっており、掴みなども問題なくできる形状であった。

その外見はまさに何処から見ても冒険者そのものである。

「うむ、エルヴィン殿が到着するまでに色々依頼をこなしての、少

々有名になっけしもうたわ」

と、丈之助がそこまで話したところでエルヴィンは、ふと腑に落ちない何かを感じた。そしてその違和感はずぐに氷解する。そう、この場での再会こそが正に不自然だったのである。エルヴィンは、丈之助へいつアクスへと到着するかは伝えていない。なのに何故今、丈之助は何故このアクスの入口である東南門にて、自分を待っていたのであろうと。

「 丈之助ど」

「 エルヴィン殿、我らは既に見られておるでな」

と、エルヴィンが言い終える前に丈之助がその言葉を遮った。焦りもせず、そして臆せもせず、淡々とした丈之助の調子にエルヴィンは多少面食らう。そして言葉を続ける丈之助からでた事実は、エルヴィンには思いも寄らぬ事実であった。

「この街アクスに入つて、3日目じゃるな、俺に監視の目がついたのは。

……最初は異人である俺が物珍しさ故かと思つていたがな、あれは忍びの類じゃの。隠行は中々のものじゃが、ずっと後をついてくる気配が俺が立ち止まった途端に無くなるは不自然というものよな」

そして、丈之助は忍びとは間者、つまりは斥候のようなものじゃな、と付け加える。

「そうか……、ちなみに丈之助殿はどうやって俺達がアクスへ辿り着く時間を知つたのだ？」

エルヴィンのその問いかけに丈之助が出した答えは至極単純であった。

「そんなものは知らぬよ、エルヴィン殿」

その答えにクレアが丈之助に問いかける。

「理由になつてないです。ふざけてるのですか？」

丈之助の態度にクレアは少し警戒を強める。その情報が宰相サイドから丈之助にもたらされていたとすれば、それは丈之助が懐柔されたことを意味し、目の前にいる丈之助は敵となるからだ。

「俺はの、『黒髪の魔法士』らしいでな。……この国で魔法士とやらは十人二十人の兵士よりも恐れられるのであるう？」

「……それが、何の答えになるんです？」

丈之助の答えに対して、クレアが語気を強めた時だ。

「……その！！ 右手で店を開いている道具屋と！！ 左後方の商人！！ それと門兵の二人じゃな！！ そういうわけで、『黒髪の魔法士』桐生丈之助はエルヴィン殿御一行に雇われているでな！！ 陣に戻つて良く伝えよ！！ 外に待機している二十程度の兵では不意討ちにもならんわ！！ わっはっはっはーっ！！」

それは突然の叫び声であった。クレアとエルヴィンは弾かれたように周囲を見る。みれば門兵は罰悪く目を伏せ、路肩で店を開いていた道具屋は店そのままに弾かれたように逃げ出し、商人もそそくさと人ごみの中へと消えるのであった。

「これで宣戦布告じゃ、楽しくなってきたのう？」

呆気に取られているエルヴィン一行を尻目に丈之助はクツクツと
楽しそうに笑うのであった。

「エルヴィン殿、敵は上手ぞ。どうしてか知らんが俺の存在は
敵方にバレておる。おそらく敵は今夜あたりの奇襲で、エルヴィン
殿の戦力を見定めるつもりだったのであるう。俺はエルヴィン殿の
着く時間を知っていたのではない、奴らの動きを張っていたまでの
ことよ」

突然の騒ぎにて周囲は未だ騒然としていた。

そんな中、丈之助はエルヴィンの肩をぼんと叩く。

「さて、長居は無用よ、拠点があるんじゃないやろう？ おそらく今日の
奇襲はあるまい、俺も同道するでの」

「……わかった。全く丈之助殿には本当に頭が上がりんな。ただ…

…」

「む？」

エルヴィンは一息付き、馬車内を見やる。

「この一行の主は俺ではない。こちらのセーラ様だ」

丈之助とセーラ。初の邂逅であった。

時は遡る。

それは、セーラが王宮を出る直前の事であった。城門を潜ろうとする馬車の行く手を塞ぐように警備の騎士たちが道を塞いだ。普段ならこのようなことは起こらない。王族が乗った馬車を塞ぐなど言語道断であるからだ。居並ぶ騎士の中心。そこに陣取るは、イプストリア宰相ファウストⅡグラウベルである。

「クッククック、お出かけですか？ セーラ様」

セーラは感情を出さないように沈黙を貫いた。王宮を出ればもうファウストと会うこともないからである。

「おや、体調がよくありませんかな、ではこの宰相。今から独り言を呟きます故、どうか気にせず馬車内で横になっただきたい！」

大仰な身振り手振りをしつつ、ファウストは馬車へと近づいた。

「聞けばファリスへご遊覧とか、いやはや、国王が伏せられている時に大したことでございますな！！」

その宰相の言葉の瞬間、クレアが叫んだ。

「無礼者！！ 宰相風情が王族であるセーラ様に何たる口利き！！」
しかし、

「黙れ」

底冷えするような宰相の言葉にクレアは息を飲まざるを得なかつ

た。クレアは騎乗中である。対して宰相はただ、そこに立っているだけだ。なうての騎士でも騎乗しているものに対しては威圧を覚えるものだが、今、クレアは逆にファウストから威圧されていた。

「今、僕は崇高な儀式の最中であるのだよ。空気が読めぬ跳ねっ返りは主の立場を危うくするぞ？　ん？」

ファウストがそう言って一歩前に出る。その瞬間、馬がクレアに逆らい道を空けた。

「ふんっ、畜生は物分りが早い。立場というものをわきまえておる……クツクツクツ」

そしてファウストは馬車へと向き直る。馬車にはほろが被せられていてセーラの姿は見えない。しかし、ファウストはお構いなしに言葉を続けた。

「さて、セーラ様はファリスへと向かわれるとのことですが、お戻りはいつですか？　もちろん無いとは思いますが！！　いやまさか！！　セーラ様、まさかとは思いますが亡命など考えられませぬよう！！　未だ魔法発動が解らぬ王族が他国へ亡命する。その意味をよくお考えになることでございます。万が一セーラ様がファリスへと亡命なされることがあれば　当然イプストリアは激しくファリスへと抗議を行います。……当然でございますな。なにせ王族魔法が他国へ渡ってしまうかもしれないからな。この空白期を目の前に、それはイプストリアの一大事でございます」

ゆっくりと、ゆっくりとファウストは馬車の周りを回り続ける。

「……もし、戦争となれば当然ウィルドとも戦争になりますでしょ

うな、ファラリスは商業の要にて、一国の公国となるのはウィルドも良しとはすまいでしょうな。ああ、なんということございましょうー！！ セーラ様の身勝手な亡命が！！ まさにいつぞやの大戦の引き金になってしまつとは　　！！！！」

なおも宰相は続ける。

「ああ、しかし宰相めは信じておりますぞ！！　聡明なセーラ様のことです。父を捨て！！　国を捨て！！　そして故郷のファラリスを戦に巻き込み！！　そしてウィルドとイプストリアの大戦の引き金などならず！！」

この宰相の従順な玩具になってくれることを信じておりますぞ？　クツクツクツ、クハ…クハハハハハハハハ！！　ヒャーッハッハッハッ！！」

狂ったような笑いの中、ファウストは道を塞ぐ騎士たちへと合図を送った。

開いた道は、まさに絶望の道であった。

セーラはこの上なき絶望の楔を、最後の最後でファウストに心へと打ち込まれたのであった。その楔は、アクスへと近づいたたびに、ぎしりぎしりとセーラの心を蝕み、絞めつけていったのだ。

その折である

「 そのの！！ 右手で店を開いている道具屋と！！ 左後方の商人！！ それと門兵の二人じゃな！！ そういうわけで、『黒髪の魔法士』桐生丈之助はエルヴィン殿御一行に雇われているでな！！ 陣に戻って良く伝えよ！！ 外に待機している二十程度の兵では不意討ちにもならんわ！！ わっはっはっはーっ！！」

耳をつんざくような大きな叫び声。しかし、不思議とうるさくは無く、むしろ心地よさを感じる温かい声であった。そして、その声は今までエルヴィンも、クレアもセーラも誰一人成し得なかつたファウスト陣営に対する初めての反撃であり、抵抗の証であったのである。

ゆらりと、何かに引き寄せられるようにセーラは立ち上がる、そして誘われるようにセーラは馬車の外へと

「ほうほう、これはめんこい主様じゃのう？」

黒髪黒目の見慣れぬ異国の人物、しかし、そのおどけた笑顔と言葉を聞いた瞬間

セーラは、丈之助の胸に飛び込んだ。

「助けてください……私達を、父様を……、……父様を助けて」

それは、ルイス王が倒れてから、初めて吐き出したセーラの本心であった。

第九話：再会（後書き）

書いてて物悲しくなる回でした。

第十話：セーラ

宣戦布告とも言えるアクス東南門での騒ぎの後、エルヴィン達はアクスでイプストリア王宮が管理をしている、王族の別邸へと場所を移していた。普段であれば屋敷を管理維持するための使用人が常駐していたが、今は人払いをしている。この屋敷自体が戦場になる可能性があるからだ。

「心身ともにお疲れになっていたようです。セーラ様はお休みになられました」

お付きのメイドであるリタが広間に集まる丈之助達にそう伝えた。エルヴィンはリタの言葉に頷くと、隊員達に指示を出す。

「わかった、隊員二名を部屋外につけよう、残り一人は外を見張りだ。頼んだぞお前ら」

はっ、と敬礼をし、隊員達が持ち場へと散っていった。リタもセーラの看病のため、セーラの寝室へと下がる。広間にはエルヴィン、クレア、丈之助の三人がテーブルを挟んで向かい合う形で座っていた。

「さて、それではまず状況の整理をしたい、我々の目的はセーラ様をファラリスへとお逃しすることだ、そこまではいいな」

その言葉に、ふむ、と丈之助が首をかしげる、

「丈之助殿、何かあれば遠慮無く言ってくれ」

その、少々腑に落ちなさそうな表情をしている丈之助に、エルヴィンが発言を促すのであった。

「……うむ、姫君の願いは父君を助けてとも言っておったでの、そこを詳しく聞いておこうか」

丈之助ならきつとそう言うであろう。エルヴィンが浮かべた表情はそのような意が汲み取れた。そして話す。二つに一つの道を選ばねばならぬ現状を。

セーラを逃がすことは、まさに父であるイプストリア王の意思であること。

敵となる宰相にセーラが囚われれば、それは無残な扱いを受けること。

その為にはなんとしても宰相の影響圏外である他国へと亡命する必要があること。

「例え、戦争の引き金になろうともな。これは亡命先のセーラ様の祖父であるファリス王も了解していることだ」

そうエルヴィンは呟いた。

「なるほどの、愛されておるのだのう、あの姫君は」

そう、丈之助が感慨深げに言うと、

「その通りです。少なくとも我々はセーラ様が、あの宰相に辱められる未来など見たくないのです」

と、クレアが両の手で自らの肩を抱きながら呟く。クレアは王宮

を出発する前のやり取りを思い出したのだ。自分でさえあれほどの嫌悪感と恐怖を味わったのだ。果たして十歳になるセーラに振りかかる仕打ちと、生まれる屈辱は想像するのもおぞましかった。

「我々はファラリス王とイプストリア王双方の意を受けて動いているのだ、丈之助殿。例えセーラ様が望まずとも、セーラ様をファラリスへと亡命させるのは絶対なのだ。……とはいってもイプストリア王は既に病床に伏せている、ファラリス王も表立っては動けん、ファラリスはイプストリアとウィルドの公国である上に、内政干渉になるからな」

ふう、とエルヴィンはため息を付き、テーブルに用意されたカップをぐいっと煽った。

その様子を見て丈之助は思う。エルヴィンやクレアは決して悪い人間ではない。王の意を貫こうとするエルヴィンは忠義の厚い臣下である。同じ女の身ながらセーラの身を案じるのは、若い年頃のクレアならではであろう。

しかし、しかしである。

東南門にて丈之助に泣きついたセーラは、それらすべてを飲み込んだ上で、助けてと懇願したのだ。『父様を助けて』と。『私達』に含まれるエルヴィンとクレア、そしてリタを。その言葉を吐き出した途端に泣き崩れるほどに張り詰めて、本質的には誰にも理解されないままずっと、十歳の少女がもつ小さな体と心で耐えてきたのである。何故その状況になったのか、何故幼い子供がそこまで追い詰められたのか。

あらためて丈之助は思い出した。己はいつたい何のために強さを

求めたのかを。

静かに目を閉じる、頭の中に思い出されるのは、関ヶ原で見たあの光景であった。焼け焦げた田畑、跡形も無くなってしまった家、振り返れば、何も無いという絶望。

十歳の丈之助は、すべてを奪われた持たざるものであったが、セーラはあらゆるものを持たされ続け、何一つ自らの物を持ってなくなってしまうた、持たざるものであるのだ。

「こんな思いは俺一人でたくさんじゃの……」

何も、セーラのような幼子に背負わせることでは無いのだと、丈之助は呟く。持たざるものから奪い取るものには、それなりの応報を示すべきなのだ。己の力はその為にある。それは、丈之助が三十年間生きてきて、初めて意思を持って明確に力を向けるべき『敵』を見出した瞬間であった。

アクスの夜は、静かに更けてゆく。

深夜、何者かが庭内へ小さな石を投げ込んだ。その小石には文が巻きつけられていた。それは巡回中の隊員に見つけられ、そして

東の空が白み、太陽が昇る。別邸の中庭にて、セーラは精霊に祈りを捧げていた。未だ魔法発動が判別できぬセーラにとって、この

祈りは日課であった。通常の魔法発動は生まれてから一年から五年ほどで判別されるものである。その期間に体の何処かに精霊紋と呼ばれる紋章が現れ、その紋様の数にて詠唱単位が決定されるのだ。

しかしセーラは未だ精霊紋すらも発現しない、いわゆる『紋無し』であった。この世界の人間の誰も何らかの形で発現するのが精霊紋である。しかし純粋なフアラリスとイプストリアの血を継ぐものにとって精霊紋が発現しないということは過去の記録から見ても考えられないことであった。古く文献には十歳にて紋が発現したという記録もあり、十一歳になるまでとは、セーラは毎朝の精霊への祈りを欠かさなかったのである。

そんな静かな朝の一時であった。祈るセーラの後ろで護衛の騎士がその腰の剣を抜く。金属音がチャキリと響いた、その音に気づきセーラは祈りを止め、後ろを振り向く。

そこには、セーラに剣を向ける護衛であるはずの騎士がいた。

「……セーラ様、お許し下さい。隊長や副隊長と違い、我らの家族はイプストリアにいるのです」

その時、セーラの目に飛び込んできたその光景に、その小さな目が見開く。

「……お声を上げられませんよう、抵抗するようなら多少は傷ついても良いと許可を頂いております故」

隊員が、剣先をセーラに向けつつ、一步を踏み出した。ガシャリと鎧がこすれる音がした。

「……どうして」

セーラは涙を流していた。もはや自分の心を律する事が出来なかったからだ。祈りのままに、組まれたままのその手は、固く握られ細かく震えていた。

「大人しくしていただければ、リタ殿の命は保証しましょう」

セーラは予想外の展開に、声が出ない。辛うじて、どうして、と呟くだけである。

その涙は、歓喜の涙である

「……どうして……どうして貴方は、こんな私わたくしに……、こんな私に希望を与えてくれるのですか」

ドサリ、と騎士の後ろで何かが崩れる音がした。騎士が弾かれたように振り返る。そこには、エルヴィンとクレアの始末に向かったはずであった同じ分隊騎士を放り投げる黒髪の拳士が佇んでいた。

「……同じ釜の飯を食った好じゃ、殺してはおらん。連れて帰るがよいわ」

丈之助は淡々と騎士へとそう伝えようと、おもむろに一言呟いた。

「お主らには世話になった。しかし戦場で出逢ったなら、その時は遺恨無く戦おうぞ」

その丈之助の言葉を聞き、仲間を背負いながらこの場から離れる騎士の動きがピタリと止まる。

「……済まない、丈之助殿の」

「ふん、知っておったわ、俺の事を知るものなぞ、エルヴィン殿とクレア殿を抜いたらお主らしかおらん、うぬらにも理由があったのだらう？　ここまで迷ったのであるらう？　ならばよいわ、今、

姫君が生きているのが何よりの結果であるからに」

そこで一息。

「次に牙を向いた時は容赦しない故、心してかかって来るがよいわ」

騎士が再び歩き出す。今度こそ騎士は止まらなかった。

騎士の姿が見えなくなるのを確認した後、丈之助はセーラに向き直った。

「……さてと、ふむふむ、よくもまあ泣いたものよ。綺麗な顔が台無しじゃぞ?」

ひつくひつくと、組んだ手を口元にあてたまま、未だしゃくりあげているセーラの隣に丈之助は座り込んだ。

「なに、まだ敵は来ぬよ。しばらくは休むがよい」

そういつてぽんぽんと丈之助はセーラの背中をさするのであった。そのまま、しばらく時が経つ。セーラは腫れた目を拭い、濡れた頬を袖で拭き取り横の丈之助を見上げるのであった。

「……おじさま?」

「なんじゃ?」

「おじさまは、何故私を助けて戴けるのでしょうか」

そう問いかけるセーラの瞳は丈之助をまっすぐ見据えていた。先の修羅場の面影など決して見せず、十歳とは思えない落ち着き様であった。

「なんじゃ……お主は助かりたくないのか?」

「そんなことはないですの。でも」

と言ったところで丈之助の手がセーラの頭に置かれた。そしてそのままくしゃくしゃと、丈之助はセーラの頭を撫でてやるのであった。

「ようこれまで耐えたの。大したものじゃ」

その瞬間、びくとセーラの体が震えた。同時にぼたぼたと大粒の涙が瞳から溢れ出す。

まさに、セーラの心に掛けられた呪いが、音を立ててガラガラと崩れていった瞬間であった。丈之助のその一言が、王族の使命、父の意思、そして計らずもエルヴィン達を巻き込んでしまった責任など、セーラの心を縛っていた楔を、今この時だけ綺麗に取り払ったのである。

セーラの右手が、自然と丈之助の裾を掴んだ。丈之助はその手を握り、肩を震わせるセーラの肩を優しく抱いてやるのであった。

「……うあ……、し……ひっく……です……」

セーラから流れ出る涙は、なおも止まらない。

「泣くがよいわ、俺以外誰も居らぬ、俺が時も、……そうだったからの」

「……怖かった!!! 怖かったです……!!! っ……私!!! 城に帰りたくない!!!、でも……ひっく……父様が……私の……たった一人

の父様が……でも助けられなくて!!」

セーラの叫びに、丈之助はそうか、と頷いた。

「この身を弄ばれるならば……いつこのアクスで命を絶とうとも思いました……でも……怖いのです!! 私、……私は王族として誇りを守って死ぬこともできない臆病者なのです　!!」

それはここまで来て、初めて吐露した偽る事無きセーラの本心であつた。

「私のために、誰もが不幸せになつていくのです……、もう、耐えられません　」

そこでセーラは堰が切れたように、わああと泣き出した。本来セーラはもっと感情を多く外へと出してもよい年頃であるのだ。

甘えることを忘れてしまった哀れな姫君の数年分の涙が静かな中に染みこんでいく。その二人を見守るように、朝霧が周囲を優しく包んでいく。そして丈之助はセーラが泣き止むまでずっとそばで肩を抱いてやるのであつた。

朝霧の中、丈之助とセーラの会話は続く。濃い朝霧に隠れて二人の姿は見えず、声のみが周囲に響いていた。

「のう、セーラよ」

「……はい、おじさま?」

セーラが泣き止むの待ってから、丈之助は優しくセーラに問いかける。

「イプストリアの中で最強の魔法士は誰じゃ？」

「……………んと、えと、父様だと思いますが？」

「ふむ、俺はクリア殿の魔法を見たのだが、セーラの父君の魔法はもつと凄いのであろうな？」

「はい！！……………父様の水ウォルター・アンカーの鉄槌はすごいですの！！！」

そう、嬉しそうにセーラは丈之助の問に答えた。

「はっはっは、なんとも物騒な名前じゃのう……………、なればその魔法の元となる精霊様とやらはもつとすごいんじやろつものう？」

「はい、イプス様を始めとする四大精霊様はこの世界を作った元ともいわれていますの！！！」

「……………ではの、そんな精霊様にこの国で最も愛されているのは誰じやろつな？」

「……………えつと、それも父様？」

「……………ということになるかの、さて、よく考えてみるがよいセーラよ。そんな父君が毒ドクごときでどうにかなるものかの？」

丈之助の言葉にセーラはふと顔を上げる。丈之助のその言葉は、気休めながらも今セーラにとって確かな希望となった。そう、ルイス王は倒れども、死んでしまったわけではないのだ。

「……………おじさま？」

「父君も闘っておるのじゃ、お主がこんな所でピーピー泣いては居られんのう？ はっはっは」

そう笑い飛ばすと、丈之助はセーラを持ち上げ、自らの右肩にちよこんと載せるのであった。おもわずセーラはきゃ、と声を漏らす
が、すぐに手近にあった丈之助の頭に手を回すのであった。

「セーラよ、約束しよう。俺は何があってもお主の味方じゃて」

のっしのっしと歩く丈之助は尚も言葉を続ける。

「大いに信用するがよいぞ？ はっはっは」

セーラは丈之助の肩の上で、はいと頷き、ぎゅっと回した手に力を込めるのであった。

どん、と大きな音を立てて広間の扉が開く。

「さあ、エルヴィン殿、出立ぞー！ー」

「ですのー！ー」

エルヴィンとクレアとリタは、その丈之助とセーラの様子に、まさ
さに目を丸くするのであった。

第十話・セーラ（後書き）

続きます。

第十一話：追っ手

未だ朝霧が立ち込める早朝。アクスの王族別邸から出てゆく者たちがいち早く追いかけてきた。

一つ目の影は馬車。アクス北西門を抜けてファラリスへと向かう一行。

二つ目の影は旅装束に身を包んだメイドの女。アクス当南門の乗合馬車にて王都イプストリアへ。

そして、三つ目の影は子供一人が中に入れそうな背負子うかこを背負った丈之助である。

その丈之助は馬車と同じく北西門をくぐり、ゆっくりとその歩を進めるのであった。

アクス北西。街道から少し逸れた枝道に野営が敷かれていた。居並ぶテントにはイプストリア王国の紋章があり、この野営が王国騎士団の駐屯地であることを証明していた。周囲は木々に囲まれてはいるが中は開けた地形であり、駐屯地からは多くの人や騎馬の気配が伺えた。

その駐屯地に、騎馬が慌ただしく一騎駆け込んでくる。セーラ達の動きを張っていた斥候である。セーラ一行がアクスを出立したことを報告しに早馬を飛ばしてきたのであった。斥候役の騎士は下馬をすると馬を見張りの兵に任せ、司令のテントへといち早く駆けこむのであった。

「ご報告致します！！ セーラ様に動きあり！！ 馬車は北西門へ親衛騎士二名が同乗！！ セーラ様の姿はこの霧と遠目にて確認できませんでしたが、おそらくは乗車されているかと思われませす！！ セーラ様付きのメイドは東南門よりイプストリアへと向かいました！！ おそらく少しでも身を軽くするために暇を出されたと思われませす！！」

司令のテントには四人の男が座り、斥候の報告を聞いていた。その内の一人。リーダー格である騎士の男が斥候に、黒髪の魔法士はどうした、と、問いかけた。

「はッ……それが。……馬車とは別行動にて北西門を抜け、ファリスへと向かっております」

その報告にピクリと報告を聞いていた騎士の男のまゆが上がる。

「……別行動だと？ 馬車とは異なる街道を進んでいるのか？」
「いいえ！！ 馬車の後を追うように同じ道を進んでおりますが、その……少々奇妙なところがあり」

と、斥候が何か考えこむように、口ごもった。

「いい、続ける。発言を許可する」

「はッ……、それが黒髪の魔法士は大きな荷物を担いでおります……！！ その、それが丁度小さな子供が入りそうな……」

斥候がそこまで喋ったところで、騎士の横にいた男がクツクツと深く笑い出した。場にそぐわないその笑い声に、司令テント内の視線がその男の元へ一斉に集る。

男の容姿は騎士の駐屯地にしては、実に特徴的であった。身につけているものは一般的な上下の冒険者服ではあるが、その服のあちらこちらには接続具の様なものを取り付けられていた。接続具には何か柄のようなものを取り付けられている。柄からは革を紐状に編んだ鞭が巻かれていた。それが右腿と左腿に一つずつ。両肩にやや小さめのものに同じく一つずつ。そして腰に一際太い鞭が一つ。但しこの鞭は革製では無く、芯に鎖が入っている金属鞭であった。

騎士の男　この隊の隊長である男。フリオ「グロツセアが再び口を開いた。

「ヤザン殿、何か可笑しいところでもあったであろうか」

問いかけるフリオに、ヤザンと呼ばれた男は湧き上がる笑いを堪えながらも、いや、これはおもしろえと、一言漏らしたのあった。かし、その返事に納得が行かない他の二人が声を上げた。一人はヤザンと同じく雇われ傭兵であるアレクセイ「フェメールであった。

「面白いとはなにごとか、一人で理解してもつまらんわ」

そして、声を上げたもう一人はこの隊の副隊長、リヴ「ヴェイロンである。

「ターゲットが出発している。時間がないのだ、伊達や酔狂で意見を言うのは控えてもらいたいものだな」

と、それぞれ毛色の異なる二人の言葉に捲し立てられるとヤザンと呼ばれた男は、大きくため息を付き、やれやれと肩をすくめた。

「何だお前ら、気づかないのかよ、こいつらやる気満々じゃねえか？　これが笑わずにいられるかってんだ、なあ？　クックッ　いやあ、楽しくなってきた。宰相もこの俺を呼ぶわけだわ……。　　お　い……その斥候！！」

ヤザンに突然呼ばれた斥候は、ビクリと体を震わせる

「屋敷はどうだ？　誰か残っていたか？」

「い、いえ、もぬけの空でした。屋根裏、床下、全て調べてあります！！」

斥候の言葉が終わると、ヤザンはくるりとフリオ、リヴ、アレクセイへと向き直った。

「さあ、どうする？　奴ら生意気にも分散してきたぞ？　メイドを捨て、ご丁寧にも二択を欠けて俺らを迎え撃つつもりだな、どちらかが時間稼ぎで、どちらかが本命なんだろうよ、いやあ、大した奴らだ。分隊連中に裏切られてへこんでいると思っただら、なかなかどうして開き直りやがった！！　いやあ、結構結構。涙ぐましいねえ！！　なあ、隊長さんよ？」

と、傲岸不遜にヤザンがフリオに会話をふった。

「……かまわん、相手の望みどおり隊を二手に分ける。……ヤザン殿とアレクセイ殿が到着する前なら、足をすくわれていたかもしれないかな」

そして冷静にフリオは言った。

.....

「これでこちらは魔法士が四人だ。逆に馬車を足止めし、黒髪の魔法士を先に叩く。当たり前でも外れでも、親衛騎士の二人を殺して終わりだ」

そう、ファウストは最後の詰を誤らなかつたのだ。エルヴィンの分隊騎士からもたらされた丈之助の情報は不確かなものであったが、リガルドを単独撃破できる実力の持ち主ということは判明していた。そこでファウストは丈之助が魔法士であろうとなかろうと問題ない選択をすることにしたのだ。それは同じクラスの戦力の投入である。相手側の魔法士が増えるのであれば、こちらも魔法士を増やせば良いと考えたのである。少女一人を捕らえるのに、五詠唱^{クインテッブル}単位級魔法士四名という、千人に一人と言われている魔法士の希少さを考えると、それは前代未聞の戦力の投入であった。さらに言えば、魔法士の護衛として、それぞれ騎士分隊が十名ずつフリオ、リヴ、アレクセイ、ヤザンへと用意されたのである。

「我々が親衛騎士を受け持とう、エルヴィンとクレアのことならよく知っているからな」

フリオがそう言いリヴに指示を出す。

「ああそうだ、隊長さんよ」

テントの外に向かうフリオをヤザンが呼び止める。

「宰相からの情報だけだよ、奴らはファリスからわざわざルイス王がご指名した二人だそうだ。魔法持ちは女だけってことだがよ、そんな奴がただの騎士なわけねえ、使うと思っていきな？ まあ俺らが追いつくまで時間を稼いでくれりゃそれで終わりだ、あんたの魔法ならおあつらえ向きだろう？」

「……期待はしないで待っていてよう」

そういつてフリオはテントを出た。

「それじゃ、俺らは噂の黒髪の魔法士か、まあすぐに追いてやるよ。クククッ」

そういつて歩き出すヤザンにアレクセイが後ろから、よう、と話しかける。

「どこかで聞き覚えがある名だとは思ったが、……あんたまさか、あのヤザンか？」

アレクセイのその言葉に、ヤザンはだからどうした？ と振り返る。

殺し屋ヤザン。

彼の脳裏に一瞬浮かんだ言葉がそれであった。

「いいや、何でもなし。精々足を引く張らんよう気をつけるさ」

朝霧の中、エラルド街道ファリス方面にて、丈之助はゆっくりと歩いていた。既に日が出ていてもおかしくは無かったが、空が曇天に覆われているせいでいつもの時間より周囲は薄暗い状況であった。その丈之助の横を二十名程度の騎馬達が駆け抜けていった。先行するエルヴィン達を追う、フリオとリヴの部隊であった。その部

隊は丈之助を横目を通り過ぎ、朝霧の中に消えて行くのであった。

またしばらく丈之助は街道を進む。

そして、再び後方から騎馬の音が聞こえるのを確認すると、丈之助は足を止めるのであった。

「さてと、ここまでは策通りじゃの」

丈之助が立ち止まった場所は、ちょうど街道が山のすぐ近くを通っている場所であった。脇を見れば、そこには生い茂る木々と深い森がある。そう、この場は丈之助にとっては手馴れた場であったのだ。

「……まったくジョーの奴、ほんと人使い荒いんだから」

アクス王族別邸。屋根の上で隠れながらエレンはブツブツと丈之助への恨み言を吐いていた。そしてその横には、セーラがちょこんと座っている。

「……もう、この迷彩石だってタダじゃないんだからね……後で数倍の仕事させてやるわ、うふふ、ふふふふ」

そんなエレンを見て、セーラはあの、と話しかけた。

「あの、その、お金なら少しは持ち合わせがございますの」

くい、くいと、自己の世界に入りつつあるエレンの裾を引っ張り、彼女を現実へと引き戻しつつ、首を傾げるセーラがそこにいた。

その愛らしい挙動の犠牲者はエレンであった。

（あああああ！！ もうなに！？ なにこの子超可愛い！！ お持ち帰りしたい！！ ジョーの奴、こんな子と知り合いとか、まったく持って断じて許すまじ！！ 後できつちりぎつちり問い詰めてやるんだから！！）

「……ちょっと怖いのです」

そんな全く表情を隠せていないエレンに、少々引き気味のセーラであった。

「え、ああ、ごめんなさいね。でも貴方なんで騎士団なんか追われているの？ 見たところ犯罪者には見えないけど……」

「はい、お話をすると長くなるんですけど、ちょっとした鬼ごっこみたいなものですの」

鬼ごっこで騎士が乗り込んで来て屋根裏やらベッドやら床下やらをひっくり返すわ突き刺すわするものだろうか、とエレンは思ったが深くは聞かないことにした。これ以上聞いてはいけないうえに予感があったからである。

「……それにしても、セーラちゃんだっけ？　こんな状況なのによく落ち着いているわね」

その、ふとこぼしたエレンの疑問に、

「　はい、だっておじさまはお強いのですものー!!」

そう答えるセーラには、ついさっきまでの彼女には考えられなかった、年相応の可愛らしい笑顔が浮かべられていた。

第十一話・追っ手（後書き）

続きます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2997w/>

拳豪記

2011年10月29日03時06分発行